

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第150集

明神遺跡発掘調査報告書

国道45号久慈バイパス関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

明神遺跡発掘調査報告書

国道45号久慈バイパス関連遺跡発掘調査

序

広大な面積を有する本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保護し、保存していくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実に重要な一施策であります。特に幹線道路網の整備は、産業経済発展の大動脈として多方面から期待を担うものであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的な課題となっております。当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設の趣旨にもとづき、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書の久慈市明神遺跡は、夏井川右岸の丘陵斜面に立地し、発掘調査によって縄文時代の狩り場跡と平安時代の集落跡であることが明らかになりました。琥珀や鉄滓等の出土とあわせて、沿岸部の平安時代の集落変遷を解明するうえで貴重な資料になるものであります。

この報告書が期学の研究のみならず広く活用され、埋蔵文化財に対する理解が深められるよう願ってやみません。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所、久慈市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成2年8月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中 村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県久慈市夏井町字大崎第3地割91-6ほかに所在する明神遺跡^{みやまひら}の調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、国道45号久慈バイパス建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡登録台帳番号と調査略号は、次のとおりである。
遺跡番号……JG20-0196 調査略号……MG-89
4. 調査期間・調査面積・調査担当者は、次のとおりである。
平成元年6月1日～9月14日、8300㎡、高橋義介・佐瀬隆
5. 室内整理期間と整理担当者は、次のとおりである。
平成元年11月1日～平成2年3月31日、高橋義介
6. 下記の分析・鑑定は、次の方々・機関に依頼した。(敬称略)
石質鑑定……佐藤二郎(佐藤地質工学研究所)
樹種鑑定……早坂松次郎(岩手県木炭協会)
鉄滓分析……赤沼英男・木村克則(岩手県立博物館)
種子鑑定……バリノ・サーヴェイ株式会社
火山灰分析……三辻利一(奈良教育大学)
7. 本報告書の執筆は、I調査に至る経過を昆野靖、II遺跡の立地と環境②を佐瀬隆、他を高橋義介が分担をした。
8. 野外調査及び室内整理に際しては、次の機関と方々からご教示とご協力を賜った。(敬称略)
建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所、面代民義・千葉啓蔵(久慈市教育委員会)
9. 野外調査では、佐々木仁氏をはじめとする久慈市の方々に従事していただいた。
10. 調査にかかわる諸記録及び遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

〈目次〉

序
例言

〈本文〉

I. 調査に至る経過	1	V. まとめ	
II. 遺跡の位置と環境		1. 陥し穴状遺構	47
1. 遺跡の位置	3	2. 土坑	47
2. 地形と地質	3	3. 焼土遺構	47
3. 周辺の遺跡	7	2. 溝跡	47
III. 調査経過と調査方法		5. 竪穴状遺構	47
1. 調査の経過	10	6. 平安時代の竪穴式住居跡	48
2. 調査の方法	10	7. 平安時代の土器と遺物	50
3. 室内整理の方法	11	付編1 明神遺跡出土火山灰の 蛍光X線分析	51
IV. 調査の結果		付編2 明神遺跡4号住居跡出土種子 同定報告	52
1. 概要	12	付編3 明神遺跡出土鉄滓の金属学的 解析	54
2. 遺構と伴出遺物	12		
3. 遺構外の出土遺物	44		

〈図版〉

第1図 遺跡の位置図	2	第10図 1号陥し穴状遺構	12
第2図 地質図	3	第11図 遺構配置図	13
第3図 段丘分布図	3	第12図 土坑	15
第4図 明神遺跡付近の平坦面分布図	4	第13図 焼土遺構	16
第5図 遺跡の立地する地形断面図	5	第14図 1号溝跡	17
第6図 地形・地質模式断面図	6	第15図 竪穴状遺構	18
第7図 B6調査区の土層実測図	6	第16図 1号住居跡遺構・遺物	20
第8図 地質層序・土壌層位学的区分図	7	第17図 2号住居跡遺構・遺物	22
第9図 周辺の遺跡位置図	8	第18図 3号住居跡	23
		第19図 3号住居跡遺物(1)	25
		第20図 3号住居跡遺物(2)	26
		第21図 3号住居跡遺物(3)	27

第22图	3号住居跡遺物(4)……………	28	第30图	10号住居跡……………	38
第23图	3号住居跡遺物(5)……………	29	第31图	10号住居跡遺構・遺物……………	39
第24图	4号住居跡遺物(1)……………	31	第32图	11号住居跡……………	41
第25图	4号住居跡遺物(2)……………	32	第33图	11号住居跡遺構・遺物……………	42
第26图	5号住居跡……………	33	第34图	12号住居跡遺構・遺物……………	43
第27图	5号住居跡遺物……………	34	第35图	遺構外出土遺物(1)……………	45
第28图	7号住居跡遺構・遺物……………	35	第36图	遺構外出土遺物(2)……………	46
第29图	9号住居跡遺構・遺物……………	36			

〈写真図版〉

図版 1	調査前近景・作業風景……………	61	図版 15	構跡・陥し穴状遺構・焼土遺構……………	75
図版 2	土層断面……………	62	図版 16	住居跡出土遺物(1)……………	76
図版 3	1号住居跡……………	63	図版 17	住居跡出土遺物(2)……………	77
図版 4	2号住居跡……………	64	図版 18	住居跡出土遺物(3)……………	78
図版 5	3号住居跡……………	65	図版 19	住居跡出土遺物(4)……………	79
図版 6	4号住居跡……………	66	図版 20	住居跡出土遺物(5)……………	80
図版 7	5号・7住居跡……………	67	図版 21	住居跡出土遺物(6)……………	81
図版 8	9号住居跡……………	68	図版 22	住居跡出土遺物(7)……………	82
図版 9	10号住居跡……………	69	図版 23	住居跡出土遺物(8)……………	83
図版 10	11号住居跡(1)……………	70	図版 24	住居跡出土遺物(9)……………	84
図版 11	11号住居跡(2)……………	71	図版 25	遺構外出土遺物(1)……………	85
図版 12	12号住居跡・6号竪穴状遺構……………	72	図版 26	遺構外出土遺物(2)……………	86
図版 13	8号・13号竪穴状遺構……………	73			
図版 14	土坑……………	74			

〈表〉

表 1	九戸地域段丘層序表……………	4	表 3	平安時代住居跡・竪穴状遺構一覽表……………	48
表 2	発掘調査遺跡一覽表……………	9			

1. 調査に至る経過

一般国道 45 号は、仙台市から陸中海岸沿いに北上して青森に至る総延長 509.8 km の路線である。県北部沿岸においては主要幹線道路であるが、近年の交通量の増大に伴う機能低下のため、昭和 46 年に久慈バイパスの建設が検討され、昭和 48 年に路線が決定された。バイパスの起点となる久慈市長内町 17 地割から終点の同市夏井町大崎まで総延長は 7.8 km、幅員 12-16 m であり、昭和 56 年から事業に着手している。

これにかかわる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、建設省東北地方建設局三陸工事事務所と岩手県教育委員会との間で現地確認調査を含む事前の協議がなされ、工事計画に沿って発掘調査を実施することとした。用地内には上野山、小屋畑、中長内、源道、明神の 5 遺跡があり、4 遺跡についてはすでに発掘調査を終了し、調査報告書を刊行している。

明神遺跡については、県教育委員会が昭和 62 年 8 月 24 日付け「教文第 289 号」により昭和 63 年度における埋蔵文化財に関連する土木事業等について照会し、三陸国道工事事務所は昭和 62 年 9 月 29 日付け「建東陸調第 76 号」により久慈バイパス関連の遺跡について回答した。これにより県教育委員会は明神遺跡の一部 1,300 m² について、昭和 63 年度における岩手県文化振興事業団の受託事業として調整し、当埋蔵文化財センターは昭和 63 年 7 月 1 日付け委託契約により調査に着手することとなった。さらに県教育委員会は昭和 63 年 9 月 9 日付け「教文第 320 号」により昭和 64 年度の事業について照会し、三陸国道工事事務所は昭和 63 年 9 月 22 日付け「建東陸調第 70 号」により継続事業について回答した。県教育委員会は同様の協議を重ね、未調査区域 5,600 m² について県文化振興事業団が継続調査することとし、当埋蔵文化財センターが平成元年 6 月 1 日付け契約により実施することとなった。

その後、三陸国道工事事務所は県教育委員会に対し、平成元年 7 月 6 日付け「建東陸調第 61 号」により設計変更に伴う調査面積変更の協議を行い、調査面積は 8,300 m² となった。



第1図 遺跡の位置図

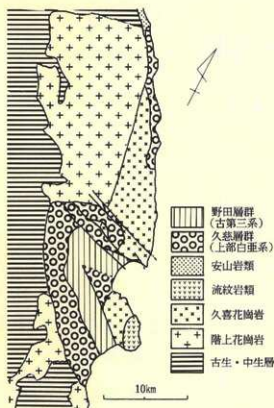
II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

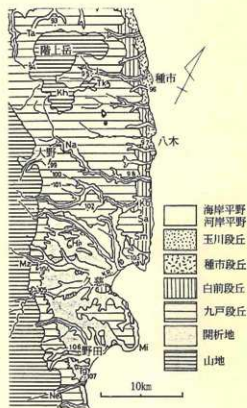
明神遺跡は、東日本旅客鉄道八戸線陸中夏井駅の南西 400 m 付近に位置している。国土地理発行の 5 万分の 1 地形図【久慈】の図幅に含まれ、北緯 40 度 12 分、東経 141 度 47 分付近にあたる。遺跡の所在する久慈市は、岩手県の北東部の三陸沿岸部にあり、九戸地方における行政・経済・文化の中心都市である。北側は種市町・大野村、西側が山形村、南側が岩泉町・普代村の 2 町 3 村と隣接し、総面積は 325.66 km²である。

2. 地形と地質

九戸地方は、第 2 図に示した後期白亜系花崗岩類、後期白亜系堆積岩類（久慈層群）、古第三系堆積岩類（野田層群）などを基盤として海岸段丘のよく発達するところである。これらの段丘を石田ほか（1969）は、高位のものから順に九戸段丘、白前段丘、種市段丘、玉川段丘に区分した（第 3 図）。また、米倉（1963）、照井（1983）は、九戸段丘、白前段丘をそれぞれ複数



第 2 図 地質図 (照井, 1986)

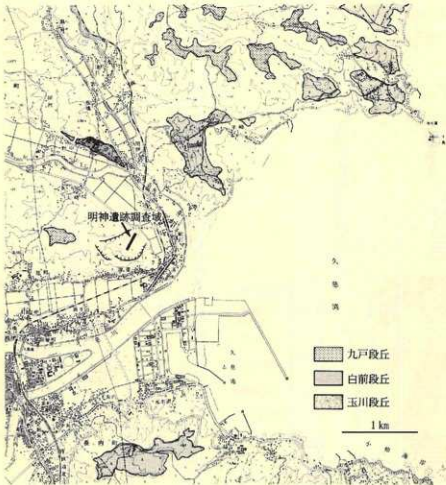


第 3 図 段丘分布図 (石田ほか, 1969)

表1 九戸地域段丘層序表 (石田ほか, 1969)

•	段丘	段丘構成層	被覆テフラ	
			南部浮石	八戸火山灰
I	海岸平野	砂・礫層	南部浮石	
			八戸火山灰	
II	玉川段丘	玉川礫層	八戸火山灰	
			種市火山灰	
III	種市段丘	種市砂層	種市火山灰	
			九戸火山灰	
IV	白前段丘	砂礫層	九戸火山灰	
			九戸火山灰	
V	九戸段丘	久慈砂礫層	九戸火山灰	
			九戸火山灰	

* Standard sequence of the terraces along the Pacificcoastal region (Nakagawa, 1961)



第4図 明神遺跡付近の平坦面分布図 (国土地理院「1:25,000久慈」の一部使用)

の段丘に細分している。

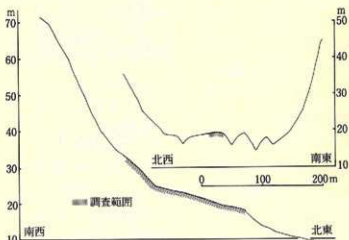
各段丘面は、累積テフラ層に被覆される。テフラ層は、古期から九戸火山灰層、種市火山灰層、八戸火山灰層、南部浮石層に分けられる(石田ほか, 1969)。九戸段丘は九戸火山灰層以上、白前段丘は九戸火山灰層の上部以上、種市段丘は種市火山灰層以上、玉川段丘は八戸火山灰層以上をのせる(表1)。

この累積テフラ層は、九戸地方の西方に位置する十和田・八甲田の両火山を給源とするものであるが、遼東のテフラ層が狭在することも確認されている。たとえば、種市火山灰層の最下部に認められる白タフ(wt)(大池・中川, 1979)は、洞爺火山起源の広域テフラであることが明らかにされた(町田ほか, 1984)。なお、当テフラの噴出年代は13-9万年前で、最終間氷期(約13万年前前後の顕著な温暖期)層準の認定に有効である。種市火山灰層をその構成層上にのせる種市段丘は最終間氷期段丘と推定され、本邦の段丘模式地となっている南関東の下末吉段丘に対比される。

第4図は、明神遺跡周辺の平坦面の分布を示したものである。標高約160m前後に広がる高位の平坦面が九戸段丘、100m前後の平坦面が白前段丘である。種市段丘の発達は極めて小規模である。この地域の平坦面の発達は、北部地域に比べ明らかに悪く、特に夏井川、久慈川、長内川流域では、開析丘陵が広がり平坦面は頂面付近に部分的に残されているにすぎない。これは、この流域の基盤地質が後期白亜紀以降に形成された半固結～未固結の堆積岩類であり、夏井川以北の花崗岩地帯に比べ差別的侵食を受けたためと推定される(米倉, 1966)。なお、基盤地質の影響は、海岸線の形態にも表れ、北部の花崗岩地帯では直線的な海岸線がみられるのに対し、堆積岩地帯では、海岸が顕著に湾入して久慈湾、野田湾を形成している(照井, 1983)。

明神遺跡は、夏井川と久

慈川にはさまれた開析丘陵地の東端、北東斜面に位置する。この斜面は、波状を呈し、左右背後は遷緩点をへて急傾斜の斜面によって取り囲まれている(第5図)。空中写真の判読によれば、一種の斜面崩壊地形と判断される。崩壊時期は、後述するように南部浮石(約9,000年前)以新の



第5図 遺跡の立地する地形断面図

テフラ層が斜面を覆っていることから完新世初頭と推定される。この事件には、最終氷期終了に伴う急激な気候の温暖湿潤化が関係している可能性が考えられる。

第6図は、遺跡付近の地形・地質模式断面図である。砂礫岩、凝灰岩を基盤とし、これを砂



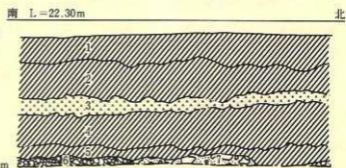
第6図 地形・地質模式断面図

礫の崩壊物が被い、波状を呈する斜面原面を形成している。そして、この原面を黒褐色土やテフラを介させた黒色土が被覆する。黒褐色土、黒色土の分布は原面起伏に支配され、凸部では黒褐色土、凹部では黒色土が卓越する。

第7図は、B6調査区の土層実測図である。最下部は、崩壊堆積物の砂礫層、その直上に赤褐色を呈する軽石がのる。これは、南部浮石である。これより上位は、層厚1m程の黒色土が中振浮石を介在させて重なっている。なお、遺構埋土には、十和田a降下火山灰、白頭山・苦小牧火山灰が認められることがある。

当遺跡で確認された4層のテフラ層のうち、南部浮石、中振浮石、十和田a降下火山灰は十和田火山起源、白頭山・苦小牧火山灰は中国と朝鮮の国境に位置する白頭山起源である。いずれも主分布域からはずれており、層厚がうすくかつ連続性に乏しい産状を示す。

当遺跡における地質層序、土層層位的区分は第8図のようにまとめられる。完新世初頭に発生した斜面崩壊がもたらした堆積



1. 黒～黒褐色土(10YR2/1.5)、L、φ3cm±の礫あり
2. 黒色土(10YR1.7/1)、L、φ3cm±の礫あり
3. 中振浮石、暗褐色(10YR3.5/4)、S
4. 黒色土(10YR1.7/1)、L
5. 黒色土(10YR1.7/1)、L、φ2mm±の軽石に富む
6. 南部浮石、暗褐色(5YR3/6)、φ2mm±の軽石類、酸化鉄沈着きわめて密である
7. φ3cm±の礫類、斜面崩壊堆積物

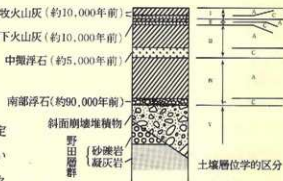
第7図 B6調査区の土層実測図

物(V層)上面を原面とし、この上にテフラの降下堆積とそれを母材として黒色腐植の集積を伴う土壌(黒ボク土)の生成が少くとも4度繰返された。最後の2つのサイクルは、十和田a降下火山灰、白頭山・苦小牧火山灰に関わるものである。しかし、前述のように両テフラ層は遺構埋土で確認されるにすぎず、その降下堆積量は土層断面で独立した単位として保存される

ほど多くはなかったものと考えられる。

3. 周辺の遺跡

久慈市内で発掘調査された遺跡に限定し、明神遺跡を含めた周辺の遺跡について概観する。資料は源道遺跡報告書（佐々木嘉直、1989）から抜粋、一部加筆したものである。遺跡番号は表2と符合している。



第8図 地質層序・土壌層位的区分図

(1) 縄文時代

早期 (8,000～6,000年前) ②源道遺跡から貝殻文系土器片が2点、⑦平沢I遺跡では早稲田4類と推定される破片が1点出土している。

前期 (6,000～5,000年前) ⑦平沢I遺跡で前葉の住居跡6棟が検出されている。土器は、胎土に繊維を含むと報告されている。⑤上野山II遺跡を含めて6遺跡から出土している。⑨大尻遺跡の包合層からは、円筒下層b式～d式の土器が多く出土している。また、同遺跡では土器に伴い琥珀が出土している。

中期 (5,000～4,000年前) 分布は希薄で、遺構の検出はされていない。⑨大尻遺跡では円筒上層a式とb式、⑪三崎III遺跡では円筒上層b式～e式、大木7・8式土器が出土している。

後期 (4,000～3,000年前) 前葉の住居跡が上野山遺跡で3棟、⑦平沢I遺跡で2棟検出されている。土器は8遺跡から出土している。初頭～前葉の土器は④中長内・⑤上野山・⑤上野山II・⑥小屋畑の各遺跡、中葉の土器は④中長内遺跡、末葉の土器は⑭大芦遺跡から出土している。

晩期 (3,000～2,300年前) ⑤上野山II遺跡から中葉～後葉に位置づけられる住居跡が1棟検出されている。土器は6遺跡から出土している。⑭大芦遺跡は大洞B-C式とC式が主体を占め、⑥小屋畑遺跡は大洞C₁式、⑤上野山II遺跡は大洞C₁とA式、②源道遺跡は大洞A式、⑤上野山遺跡から大洞A'式の土器が出土している。

以上のほかに、縄文時代に属すると考えられる遺構に陥し穴状遺構がある。10遺跡から177基検出されている。形態は溝状のものが優先するが、円筒形のものが③田中IV遺跡1基、④中長内遺跡4基、⑮兼田農場遺跡に16基検出されている。

(2) 弥生時代

遺構は検出されていない。土器は6遺跡から出土している。④中長内遺跡から前半期の土器が少量出土しているほかは、末葉の天王山式や赤穴式とされている土器である。また、北海道系の後北C式土器が同遺跡から出土している。

(3) 古代

遺構が所属する時代に不明な点があるため、ここでは古墳～平安時代を一括して古代として扱うことにする。③田中Ⅳ・⑩小袖Ⅱの両遺跡は、土師器の破片が若干出土しているだけである。住居跡は10遺跡から149棟（推定を含む）検出されている。古墳～奈良時代に属するのは⑤上野山遺跡4棟、⑦平沢Ⅰ遺跡1棟、奈良時代に属するのは②源道遺跡22棟、④中長内遺跡23棟、⑤上野山Ⅱ・⑥小屋畑・⑬上新山の各遺跡が2棟、⑦平沢Ⅰ・⑫山屋敷遺跡が1棟である。平安時代に属するのは①明神遺跡10棟、②源道遺跡21棟、④中長内遺跡29棟、



(周辺の遺跡は表2からNo.1～9を抜粋)

第9図 周辺の遺跡位置図

表2 発掘調査遺跡一覧表

No.	遺跡名	縄文時代										遺物	備考					
		住居跡					弥生・古墳											
		早期	前期	中期	後期	晩期	不明	土器	瓦	土器	土器			土器	土器			
1	明神	遺構						1										開折丘陵地の東端
		遺物			○													標高15～25m
2	源道	遺構						17				22	○	21	○			種市段丘
		遺物	○			○						土器・鉄製品						標高21～40m
3	田中Ⅳ	遺構						14										山麓地及び他の緩斜面
		遺物				○												標高35～50m
4	中長内	遺構					8	29	37			29	29	29	不明住居4	1	2	種市段丘
		遺物	○		○				○									標高31～42m
5	上野山	遺構			3	1	5					4						種市段丘
		遺物			○	○						琥珀					○	標高21～28m
5	上野山(Ⅱ)	遺構				1						2						同一遺跡尾根
		遺物	○		○	○			○			鉄製品						標高15～40m
6	小屋畑	遺構							○			2						種市段丘
		遺物	○		○	○			○									標高30～38m
7	平沢Ⅰ	遺構		6	2			25	28			2	1	14	8			変生段丘
		遺物	○	○					○			琥珀						標高58～108m
8	平沢Ⅱ	遺構							5									平沢Ⅰに隣接
		遺物																
9	大尻	遺構																有家段丘及び変生段丘
		遺物	○	○	○													標高60～116m内
10	小袖Ⅱ	遺構					6	6										三崎段丘
		遺物	○															標高157～163m内
11	三崎Ⅲ	遺構					4	7										三崎段丘
		遺物			○	○			○									標高175～182m
12	山屋敷	遺構										1						河岸段丘
		遺物										○						標高42m
13	上新山	遺構						1				2						河岸段丘
		遺物				○						鉄製品			○			標高42m
14	大芦	遺構																三崎段丘?
		遺物				○	○											標高160m
15	兼田農場	遺構					7	51				8	5+					種市(二子)段丘及び有家段丘
		遺物				○	○		○									標高50～70m前後か
遺構合計			5		5	1	9	76	177			5階～6段5舎段並	平安引不明4		1		3	古墳～不明は住居敷

※中長内遺跡の住居跡不明の8棟は縄文時代前期か後期である。

⑥小屋畑遺跡9棟(推定を含む)、⑦平沢Ⅰ遺跡14棟、⑮兼田農場遺跡が8棟であり、合計6遺跡で91棟である。この時代の特徴的な遺物に琥珀がある。琥珀が出土する住居跡は①明神遺跡2棟、②源道遺跡11棟、④中長内遺跡29棟、⑦平沢Ⅰ遺跡12棟である。

Ⅲ. 調査経過と調査方法

1. 調査の経過

明神遺跡は、昭和63年秋に遺構確認のための試掘調査を実施し、古代の竪穴住居跡が数棟検出された。それにもとづく本調査は、平成元年6月5日(月)の調査事務所設営に始まり、同年9月21日(木)の器材搬出で終了している。以下は調査の概略である。

6月5日(月)発掘器材搬入後に伐採木の枝葉や雑物除去と平行して刈払いを行う。その後、土層堆積状態や遺構検出面までの深さを把握するため、数箇所幅1.5mのトレンチを設定し試掘を行った。試掘の結果、高位の斜面区域は厚く表土層が堆積することが判明した。表土の除去は重機(ユンボ)を使用することとし、7月19日(水)までに延べ12日間行った。

粗掘と遺構検出作業を並行し、住居跡から精査・実測を開始する。9月1日(金)に現地説明会を開催する。9月11日(月)に県教育委員会文化課の調査終了確認を受ける。9月20日(水)から重機による埋め戻し作業を行い、翌21日(木)に終了し、現地を撤収する。

2. 調査の方法

(1)地区割 調査対象区域内に任意の基準点No1・2を設置し、2点間を見通す直線と基準点を通りこれに直交する直線を座標の基軸線とした。基軸線は45度32分東偏している。各基準点の平面直角座標第X系による成果は次のとおりである。基準点No1をもとに、20m×20m

$$\text{基準点No1 } X = +22,891.605 \text{ m, } Y = +81,479.987 \text{ m, } H = 34.027 \text{ m}$$

$$\text{基準点No2 } X = +22,961.654 \text{ m, } Y = +81,551.379 \text{ m, } H = 23.850 \text{ m}$$

の大調査区を設定し、さらに4m×4mの小調査区(25区画)に細分した。調査区の名称は、アルファベットと数字の組合わせてA1a区・B1b区というように呼称した。配列については第11図の遺構配置図のとおりである。

(2)粗掘・精査 調査区内の現況は山林と畑地であるため、雑木の撤去と刈払いから開始し、試掘トレンチ・粗掘・遺構検出の順に進めた。粗掘は表土層が厚い区域に重機を使用して行った。

検出された遺構には、遺構名を順に付し精査を行った。精査にあたっては住居跡4分法、土坑・陥し穴状遺構2分法を原則としたが、遺構の状況に応じて使い分けている。

(3)実測・写真撮影 実測は簡易選り方測量を設定して行ったが、一部平板測量も用いた。実測図は縮尺20分の1を基本としている。

写真撮影は、6×7cm版1台(モノクロ)と35mm版2台(モノクロ・リバーサル)を使用して出土状況、埋土断面、全景等の撮影を行った。6×7cm版については省略した遺構もある。

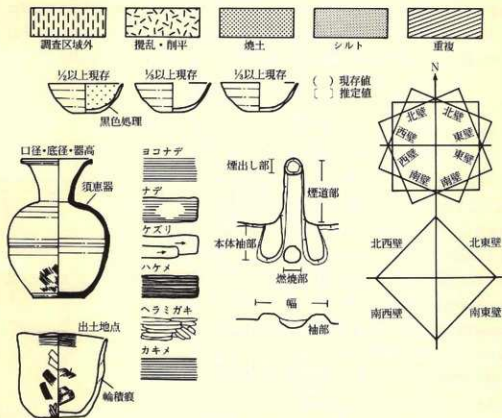
3. 室内整理の方法

(1)作業手順 室内整理は、現場で残った遺物の注記から行い、遺物ごとの仕分け、接合復元石膏入れ、遺物実測、拓本、遺物・遺構トレース、遺物写真撮影の順に作業を進めた。最後に図版と写真図版を作製した。これらの作業と併行して計測、諸鑑定、原稿を作成し、報告書に掲載した。

(2)図面・写真図版 遺構図面の縮尺は、住居跡 60 分の 1、カマド断面は 40 分の 1、土坑 60 分の 1、陥し穴状遺構 60 分の 1、焼土遺構 40 分の 1、溝跡 200 分の 1 である。

遺物図面の縮尺は、土器 4 分の 1、土器拓影 4 分の 1、鉄製品 2 分の 1、木製品 2 分の 1、石器 3 分の 1 を原則としたが、器種の大小に応じて適宜縮尺を変えて、スケールを付した。

図版中の調査区域外、攪乱・削平、焼土、シルト、重複等は下記のようなスクリーン・トーンを使用している。また、石はS、土器はP、小穴・柱穴はP₁、P₂…で図示した。その他挿図における表現方法は、凡例図版のとおりである。



挿図凡例

IV. 調査の結果

1. 概要

昭和63年10月に遺構分布確認のための面積1,400㎡を試掘し、翌平成元年6月から5,600㎡を本調査した。調査の結果、縄文時代の陥し穴状遺構1基、平安時代の竪穴住居跡10棟、時期不詳の竪穴状遺構3棟、土坑6基、焼土遺構4基、溝跡1条を検出した。

陥し穴状遺構は、平面が細長い溝状を呈するもので単独に位置している。平安時代の住居跡は調査区域に散布し、埋土中に十和田a降下火山灰や白頭山・苦小牧火山灰を伴って検出する例が多い。竪穴状遺構の平面形は、方形と長方形を呈するもので埋土に火山灰の混入は認められない。土坑は、平面形が円形、楕円形、不整形のものである。焼土遺構は、緩斜面上から検出されている(第11図参照)。

出土遺物の総量は、大コンテナ8箱余である。土器は、平安時代の土師器と須恵器で9割以上を占めており、器種は甕を中心に坏、長頸甕がある。破片が多いため復元・実測できたのは27点である。鉄製品は刀^{かすお}・釘・鏃と鉄滓が計42点余出土している。このほかに琥珀、木製品類、櫛、砥石、土製の支脚、鞠の羽口等が出土している。縄文土器の出土量は僅少である。

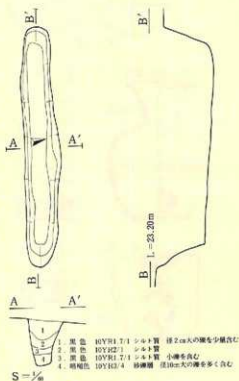
2. 遺構と伴出遺物

(1) 陥し穴状遺構

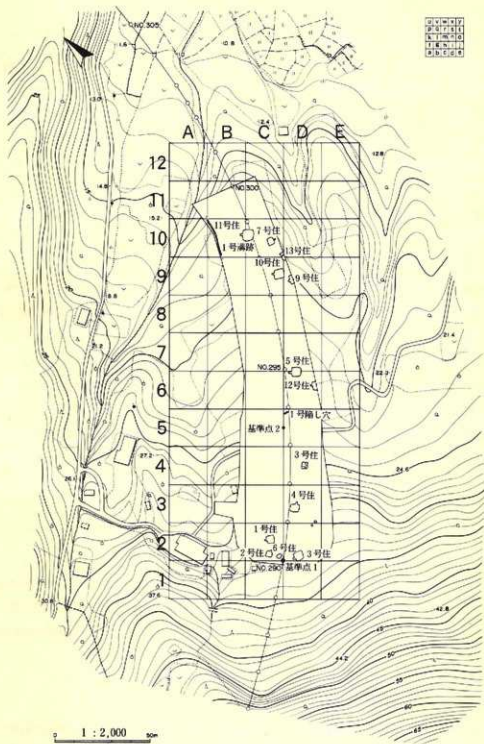
1号陥し穴状遺構(第10図、写真図版15)

調査区中央寄りのD5区に位置している。平面形は開口部、底部とも西北西-東南東方向に長軸をもつ溝状を呈している。主軸の方向は北に対し約77度西偏する。規模は開口部3.8m×55cm、底部が3.2m×24cmである。断面形は短軸方向が開口部の広がるU字形、長軸方向がやや不整の台形状を示している。底部は砂礫層を掘り込んでいるために多少の凹凸がある。深さは中央部で80cmを測る。

埋土は黒色シルト質土を主体とする4層で構成されており、上位は径2cm大の石と褐色土がブロック状で混入し、下位は壁崩落土の暗褐色土が堆積する。時期を決定する。遺物は出土していない。類例から縄文時代と推測される。



第10図 1号陥し穴状遺構



第11図 遺構配置図

(2)土坑

1号土坑 (第12図、写真図版14)

調査区北東側のC10区位置している。13号竪穴状遺構と重複し、本遺構が切っている。遺構の半分以上は南東側の調査区域外にあるために、規模の詳細が不明である。検出した規模は開口部が $2.97\text{ m} \times (1.27)\text{ m}$ 、底部が $2.65\text{ m} \times (1.15)\text{ m}$ である。平面形は不整形を呈すると推測される。壁は底面から急傾斜に外傾し立ち上がる。深さは検出面から中央で40 cmを測る。中央部から北東壁寄りの底面15 cm上位には、径15 cm～20 cmの垂円礫数個と炭や焼土が50 cm～80 cmの範囲で散布している。底面は多少の凹凸があり、堅く締まっている。

埋土は黒色～黒褐色土を主体とする4層に大別され、2層中に白頭山・苫小牧火山灰が小ブロックで混入している。遺物は出土していない。

2号土坑 (第12図、写真図版14)

調査区中央部D4区の南寄りに位置している。8号竪穴状遺構と西側が重複し、これを切っていることから新旧関係は本遺構が新しい。平面形は楕円形気味を呈している。規模は開口部が $1.85\text{ m} \times 1.75\text{ m}$ 、底部が $1.6\text{ m} \times 1.37\text{ m}$ である。壁は底面から急傾斜で立ち上がっている。深さは最深40 cmを測る。底面は南側が若干の高まりを示すほかは平坦で、締まっている。

埋土は黒色シルト主体の3層に大別され、全体が堅く締まっている。遺物は出土していない。

3号土坑 (第12図、写真図版14)

調査区中央部D4区の南寄りに位置する。8号竪穴状遺構と重複し、これを切っていることから本遺構の方が新しい。また、南側には4号土坑が接している。平面形は楕円形で、規模は開口部が $1.15\text{ m} \times 1\text{ m}$ 、底部が $85\text{ cm} \times 75\text{ cm}$ である。壁は緩やかな傾斜で底面から立ち上がっている。深さは中央部で20 cmを測る。底面は平坦で、やわらかい。

埋土は黒色シルトの単層で、粘性に富んでいる。遺物は出土していない。

4号土坑 (第12図、写真図版14)

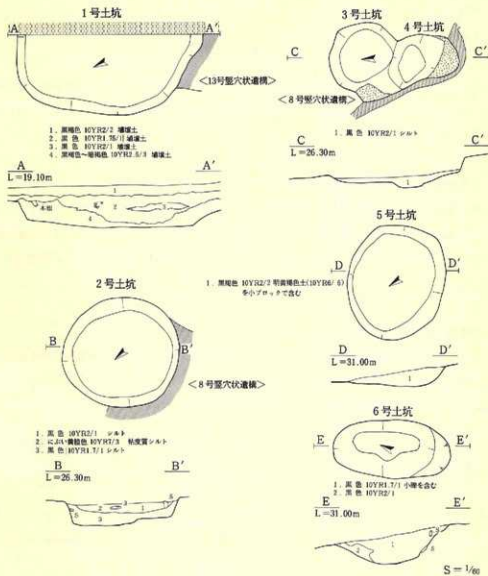
3号土坑と同様に8号竪穴状遺構と重複し、本遺構が切っている。北側には3号土坑が接している。平面形は南東～北西に長い不整形を呈し、規模は開口部が $90\text{ cm} \times 70\text{ cm}$ 、底部が $60\text{ cm} \times 40\text{ cm}$ である。壁は緩やかに底部から立ち上がる。深さは最深25 cmを測る。底面には凹凸がみられる。

埋土は黒色シルトの単層で構成される。遺物は出土していない。

5号土坑 (第12図、写真図版14)

調査区南西側D2区の緩斜面に位置し、東方5 mに6号土坑が近接している。平面形は楕円形で、規模は開口部が $1.85\text{ m} \times 1.55\text{ m}$ 、底部が $1.55\text{ m} \times 1.25\text{ m}$ 、深さは最深25 cmを測る。

埋土は黒褐色土の単層で、明黄褐色シルトが小ブロックに混入する。遺物は出土していない。



第12図 土坑

6号土坑 (第12図、写真図版14)

5号土坑と近接して位置している。平面形は南北方向に長軸を有する楕円形で、規模は開口部が1.87 m × 95 cm、底部が1.08 m × 35 cmである。深さは中央部で45 cmを測る。

埋土は黒色土の単層で構成され、小礫が若干混入している。遺物は出土していない。

(3) 焼土遺構

1号焼土遺構 (第13図、写真図版15)

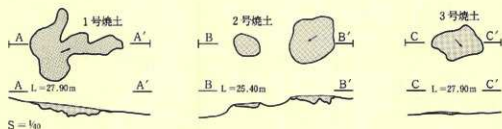
D4区の南西側緩斜面に位置し、北西側約60cmに3号焼土遺構が隣接している。黒褐色土中において検出された。焼土および焼土粒は、95cm×75cmの不整形に広がり、南側が強く焼成を受け赤褐色を呈している。厚さは5cm～10cmを測る。この焼土は現地性のものである。遺物は出土していない。

2号焼土遺構 (第13図、写真図版15)

D4区の緩斜面に位置している。黒褐色土上位で2箇所にて点在して検出された。焼土および焼土粒は、30cm×23cmの楕円形と45cm×42cmの不整形形状に広がっている。比較的強く焼成を受け明赤褐色を呈している。この焼土は1号と同様に現地性のものである。遺物は出土していない。

3号焼土遺構 (第13図)

D4区の緩斜面に位置し、南東側60cmに1号焼土遺構が隣接している。黒褐色土中で検出され、焼土は40cm×30cmの不整形長方形に広がっている。暗赤褐色を呈し、厚さは最大3cmを測る。1号と同様に現地性の焼土である。遺物は出土していない。



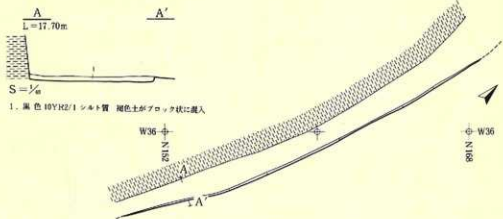
第13図 焼土遺構

(4) 溝跡

1号溝跡 (第14図、写真図版15)

調査区の北側B10～A11区に位置している。やや弧を描くように北北東-南南西方向に延びているが、西側は調査区域外に続き、両端部は削平されていることから規模等の詳細は不明である。検出した長さは22.5m、幅は最大2.2mを測り、深さは5cm～10cmと比較的浅い。壁は底面から垂直に立ち上がっており、底面は平坦である。

埋土は全体に堅くしまった黒色シルト質土の単層で、褐色土をブロック状に混入する。遺物は出土していない。



第 14 図 1号溝跡

(5) 竪穴状遺構

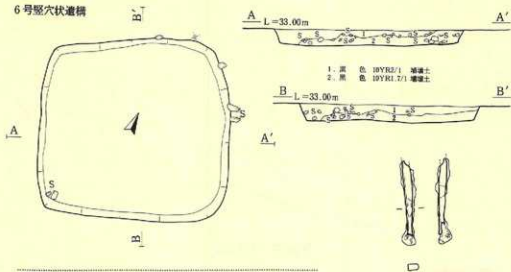
6号竪穴状遺構 (第15図、写真図版12)

- <位置>調査区の南西端C2区に位置しており、北西方向約2mに2号住居跡が隣接する。
- <検出>礫層上面で、黒色土の広がりによって確認されたものである。<平面形・規模>2.85m×2.7mの隅丸方形を呈している。<埋土>黒色土の2層に大別され、埋土の中位から下位にかけて径3cm~10cm大の亜円礫が多く堆積する。
- <壁>床面から直に立ち上がり、壁高は18cm~24cmである。<床面>礫層中にあるために多少の凹凸がみられる。<柱穴・他の施設>検出されない。
- <遺物>埋土上位から両端部が欠損した現存長4.5cmの角釘と思われるものが1点出土したのみで、時期は不明である。

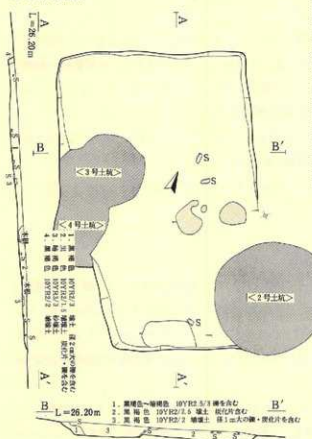
8号竪穴状遺構 (第15図、写真図版13)

- <位置>調査区中央部の南南西D4区に位置している。<検出>黒色土(2層)中で確認された。<重複>2~4号土坑と重複し、いずれにも切られていることから本遺構の方が古い。
- <平面形・規模>一部重複のために不詳であるが、4.7m×3.1mの長方形を呈すると思われる。<埋土>黒褐色土を主体とする4層に大別される。径2cm大の亜角礫と炭化物を少量含んでいる。
- <壁>床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。削平を受けていることから壁高は5cm~20cmと浅い。<床面>ほぼ平坦である。<焼土>南壁と中央東寄りの3箇所から径40cm~80cmの焼土が検出された。良く焼成を受け、厚さ2cmを測る。<柱穴・他の施設>検出し無い。
- <遺物>時期を決める遺物は出土していない。

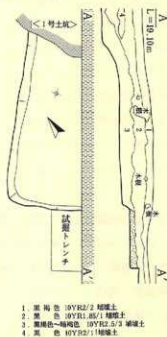
6号竖穴状道槽



8号竖穴状道槽



13号竖穴状道槽



第15図 竖穴状道槽

13号竪穴状遺構（第15図、写真図版13）

＜位置＞調査区の北東側D9区に位置している。＜検出＞表土下25cm前後の2層中で確認された。＜重複＞1号土坑と北側で重複し、切られていることから本遺構の方が古い。＜平面形・規模＞平面形は半分以上が南東側の調査区域外にのびるために不詳である。検出された北東～南西辺が2.75 m、北西～南東辺が1.15 mである。＜埋土＞3層に大別され、上位から黒褐色土、黒色土、黒褐色～暗褐色土の順に堆積をしている。

＜壁＞床面からやや直に立ち上がる。壁高は23 cm～30 cmである。＜床面＞木根攪乱があるものの平坦である。＜柱穴・他の施設＞検出されていない。

＜遺物＞出土していない。遺構の時期は不明である。

(6)竪穴住居跡

1号住居跡（第16図、写真図版3・16）

＜位置＞調査区の南西部C2区に位置し、2号住居跡が南西方向約4 mに近接している。

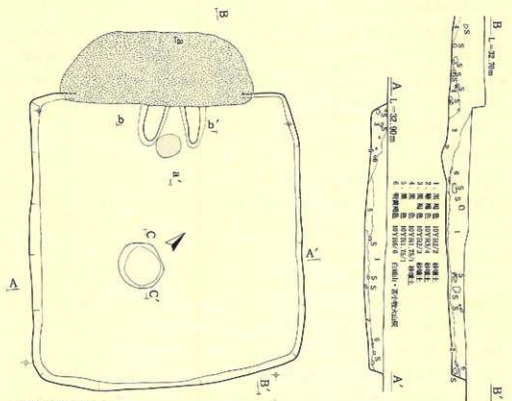
＜検出＞礫層上面において黒色土の落ち込みによって確認されたものである。＜平面形・規模＞北西壁側の大部分が攪乱・削平されているために平面形は不詳であるが、4.7 m×4.35 mの南壁がやや弧状に張り出す隅丸長方形を呈すると推測される。＜埋土＞黒褐色土を主体とする5層に大別される。壁際には径5 cm～15 cmの垂円礫が、埋土下位には白頭山・苫小牧火山灰が不連続に堆積をしている。

＜壁＞礫層中にあるため一部崩落しているものの、床面から急傾斜で立ち上がっている。壁高は削平されている北西壁が5 cmで、他の壁は29 cm前後を測る。＜床＞礫層を掘りこんでいるために多少の凹凸がある。＜柱穴＞検出されなかった。＜土坑＞中央部からやや南寄りに検出された。規模は開口部径70 cm、深さ14 cmの円形である。埋土は黒色シルト質土の単層で、にぶい黄褐色粘土が小ブロック状に少量混入している。＜周溝・他の施設＞検出されなかった。

＜カマド＞北西壁のほぼ中央部に設置されているが攪乱・削平を受け、燃焼部と袖部下端を僅かに遺存するのみである。煙道部および本体部の構造は不明である。本体部の規模は1.05 m×(65 cm)で、袖部は暗褐色シルトで構築されている。燃焼部は袖部中心よりもやや手前であり、径40 cm×35 cmの円形状に焼土化している。焼土の層厚は最大2 cmで、堅く締まっている。

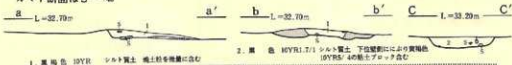
＜遺物＞床上と埋土から土師器・須恵器の甕、鉄器、鉄滓等が少量出土している。1はロクロ不使用の土師器の甕で、口縁部は僅かに外傾する。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラナデ、内面はハケメ調整を施している。2は須恵器大甕の体部破片で、外面はタケキメ調整である。

3は欠損した角釘で、現存長3.6 cm、断面形は6 mm×4 mmの長方形である。4は鉋で両端部は欠損する。現存長8.2 cm、身部最大幅2.3 cmである。5は埋土出土の鉄滓である。

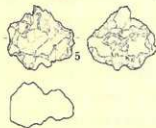


平面・断面は $S = \frac{1}{60}$

カマド断面は $S = \frac{1}{40}$



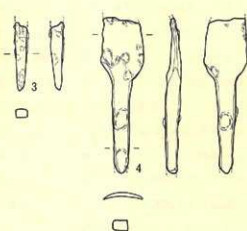
[15.4] ●●●9.4 床上



埋土



3・4は $S = \frac{1}{4}$
 5は $S = \frac{1}{8}$
 1・2は $S = \frac{1}{4}$



第16図 1号住居跡遺構・遺物

2号住居跡（第17図、写真図版4・16・17）

<位置>調査区の南西端C2区に位置している。遺構の北東側4mに1号住居跡が、南東方向2mに6号竪穴状遺構が近接する。<検出>礫層上面で確認された。<平面形・規模>平面形は隅丸方形を呈し、規模は3.4m×3.3mである。<埋土>黒色土と黒褐色土を主体とする5層で構成される。壁際は中振浮石と径5cm大の垂円礫を多く含み、埋土中位から床面直上にかけて白頭山・苦小牧火山灰がややレンズ状に堆積をしている。

<壁>床面から急傾斜ないし直に立ち上がり、壁高は19cm～25cmを測る。<床>礫層を掘り込んで平坦にしており、カマド周辺部は踏み締められて堅く締まる。<柱穴>検出されなかった。<周溝・他の施設>検出されなかった。

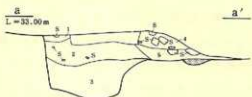
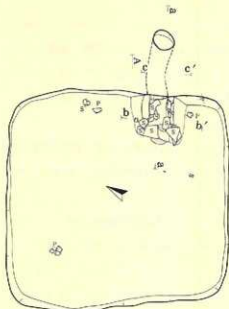
<カマド>北東壁の中央南東コーナー寄りに設置されている。本体部の規模は85cm×75cmである。袖部は長さ15cm～25cm、幅13cm前後の角礫・凝灰岩を数個芯材に据え、その上を黄褐色シルトで被覆しているが、大部分のシルトは流出をしている。天井部は崩壊し、使用された長さ40cm、幅20cmの凝灰岩は燃焼部上面に散在している。燃焼部は径30cm×28cm、最大厚さ6cmの円形状の埵土が形成されている。煙道部は径60cm×25cmの長方形状にくりぬかれ長さ1mを測る。本体部から緩やかに35cmほど下がり、上り勾配気味に湾曲しながら煙出し部へと続いている。煙出し部は径35cm×30cm、深さ57cmの楕円形状の土坑が掘り込まれている。

<遺物>カマド周辺部と床上から土師器、須恵器、土製支脚、鉄製品、鉄滓等が少量出土している。土師器・須恵器の器種は甕だけであり、細破片が大部分を占め図化できたのは1点のみである。6はロクロ不使用で、頸部に浅い沈線が巡り、口縁部はやや外反する。口縁部はヨコナデ、体部外面は縦方向にヘラナデ、内面は斜位にハケメ調整をしている。焼成は堅く、胎土に径2mm～3mm大の小石を含んでいる。7は須恵器大甕の体部破片である。外面はタタキメ、内面はヘラナデ調整を施している。8は床上から、9はカマド内から出土の土製支脚である。いずれも上部は欠損し、内部は中空である。輪積痕が明瞭で、内外面はヘラナデと指頭圧痕で調整を施しており、つくりはやや粗雑である。

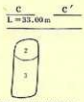
10～15は鉄製品である。10～12は両端部が欠損している角釘である。断面形は径3mm～最大9mmの長方形を呈している。13～15は器種が不明である。16は長さ6.5cm、幅6cm、厚さは最大2.2cmの鉄滓である。

3号住居跡（第18～23図、写真図版5・17～21）

<位置>調査区の南西端部D2区に位置している。北西方向6mには6号竪穴状遺構、11mに2号住居跡、北方向12mに1号住居跡が隣接している。<検出>中振浮石層の下位～礫層上面において、白頭山・苦小牧火山が混入する黒色土の広がりによって確認されたものである。



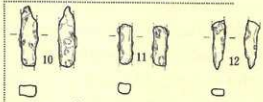
1. 黒褐色 10YR1.6/1 粘壤土 径5cmの礎を含む
2. 黒色 10YR2/1 シルト質土 径1~2cmの礎を含む
3. 黒色 10YR1.7/ 1~2/ 1 砂質シルト 2礎と同様の礎を含む
4. 黒褐色 7.5YR2/2 砂質シルト 礎土粒を散在に含む
5. 黒色 7.5YR2/1 シルト質土 シルト粒と礎土を散在に含む



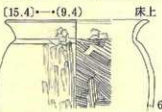
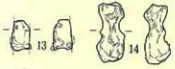
1. 黒色 10YR1.6/1 粘壤土
2. 黒色 10YR1.6/1 粘壤土
3. 黒一黒褐色 10YR2/1.5 粘壤土
4. 明黄褐色 10YR6/6 白濁土・若干物入り砂
5. 暗褐色~褐色 10YR3.5/4 砂質土



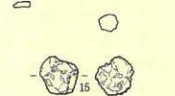
カマド断面は $S = \frac{1}{40}$



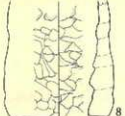
平面・断面は $S = \frac{1}{60}$



埋土下位



→ 10.4・12.2 床上

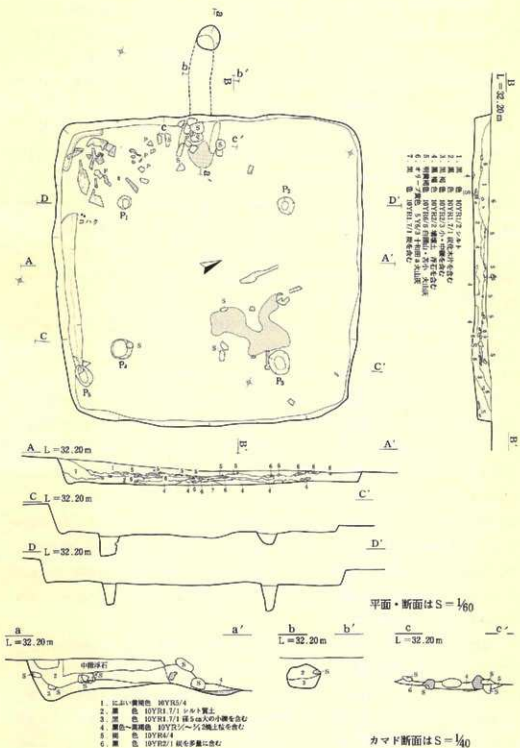


10~15は $S = \frac{1}{2}$
8・9・16は $S = \frac{1}{2}$
6・7は $S = \frac{1}{4}$

→ (11)・(8.1) カマド内



第17図 2号住居跡遺構・遺物



第18図 3号住居跡

<平面形・規模>平面形は隅丸方形を呈し、規模は5 m×4.85 mである。東壁側は他壁の長さよりも30 cm前後短小である。<埋土>黒色土を主体とする7層に大別される。上部は白頭山・苦小牧火山灰、十和田a火山灰をレンズ状に含む黒色土で構成され、堅く締まっている。下部は炭化材、炭化物、焼土を不連続に堆積している。壁際は中礫浮石を含む黒褐色土の壁前落土で占められる。火山灰層は炭化材含有土の直上に堆積をしている。また火山灰層の上下関係は比較的明瞭であり、上位が白頭山・苦小牧火山灰、下位が十和田a火山灰の順となる。

<壁>南・北壁側は床面から急傾斜で、東・西壁側は直に立ち上がっている。壁高は東壁25 cm、西壁27 cm、南壁42 cm、北壁14 cmである。<床>中央から北東コーナー側にかけて若干高まりを示すほかは平坦である。カマド周辺部には堅い踏み締め箇所がみられる。<炭化材・焼土>南西コーナー付近と中央北東寄りの床直上には、炭化材、炭、焼土が多量に散在することから本遺構は焼失家屋と判断される。炭化材は竹、板材、棒状のものがある。焼土は1.3 m×1.1 mの不整形に広がり、厚さ2 cm～4 cmである。<柱穴>柱穴はP₁～P₄の4基である。平面形は円形ないし楕円形で、柱根は確認されない。埋

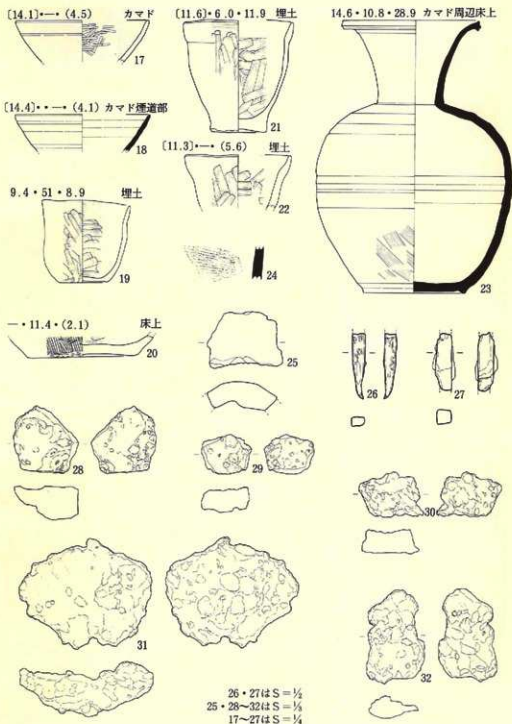
土は黒色土の単層で、締まりはなくやわらかい。

	P ₀	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
直径 cm	22×20	29×26	38×32	34×32	
深さ cm		38	44	18	43

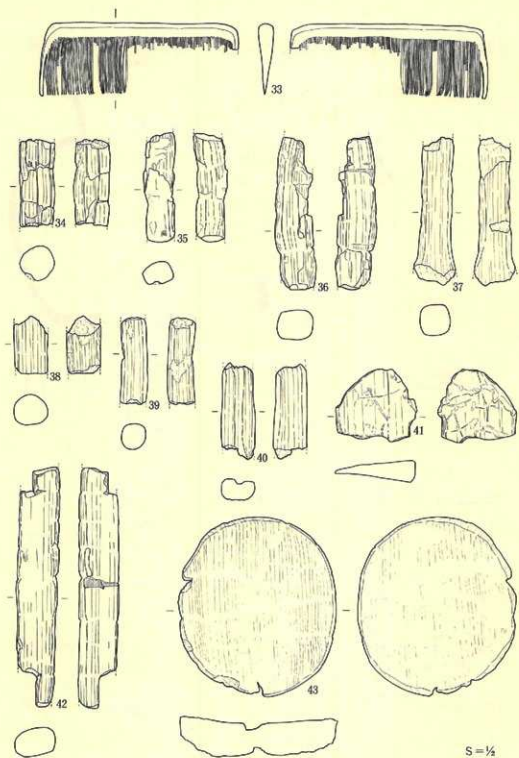
<溝溝>南壁側と南西コーナーの2箇所、幅10 cm～18 cm、深さ3 cm前後で巡っている。<他の施設>検出されなかった。

<カマド>西壁の中央部に設置されているものの、本体部の大部分は崩壊し遺存状態は良くない。袖部に芯材として使用された垂門礫は、径8 cm～22 cm、最大厚10 cmを測り内側に倒壊している。袖部を被覆したシルトはすでに流出し、下端部が僅かに残るのみである。本体部の規模は60 cm×50 cmで、天井部の構造は不明である。燃焼部はやや北側袖部寄りに、径45 cm×40 cmの楕円形状に焼土化している。焼土の層厚は最大5 cmで、締まりはなくさらさらしている。煙道部は長さ1.25 mで、径35 cm×25 cmの楕円形状にくりぬかれており、本体部から緩やかな下り勾配で煙出し部へと続いている。煙道内の壁の一部は火熱によりやや堅く締まり、赤褐色に変化している。煙出し部は径38 cm×35 cm、深さ43 cmの円形気味の土坑が掘り込まれている。上面には黒色混じりの黄褐色粘土が厚さ10 cmで充填する。この粘土は煙出し部の上部施設に使用されたものと推測される。

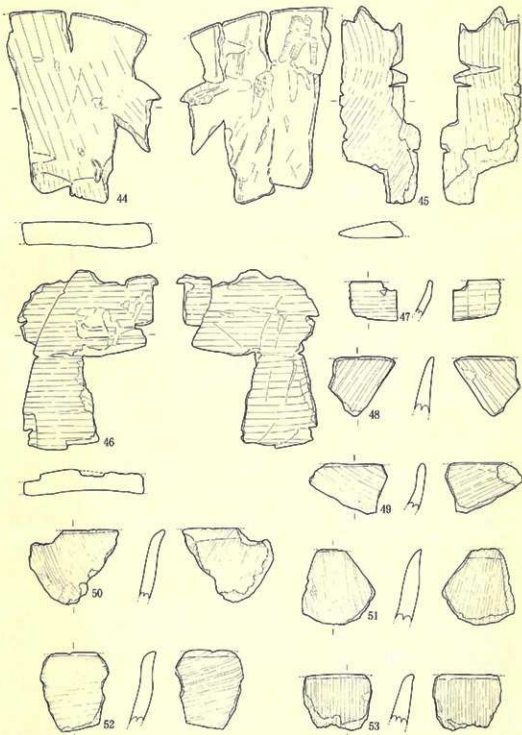
<遺物>カマド周辺部と床上から土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓、木製品、琥珀等が出土している。土器の器種は坏と甕で占められ、大部分が破片のために凶化できたのは7点である。17はロクロ成形の坏で、内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。18は底部を欠損する須恵器の坏である。19・21・22はロクロ不使用の小型の甕で、口縁部は頸部から直立気味に立ち上がっている。口縁部はヨコナデ、体部内外面はヘラナデ調整である。20はロクロ不使用の甕の底部破片で、体部外面と底面がハケメ調整されている。23は須恵器の長頸甕で、体部



第19図 3号住居跡遺物(1)

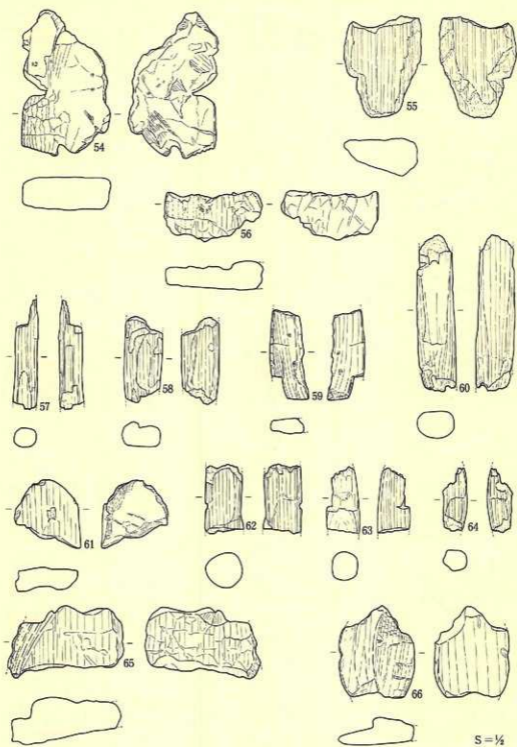


第 20 图 3号住居跡遺物(2)

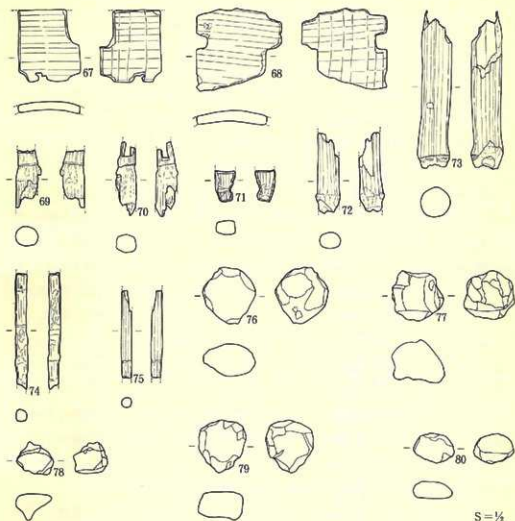


S = 1/4

第 21 图 3 号住居跡遺物(3)



第 22 图 3 号住居跡遺物(4)



第23図 3号住居跡遺物(5)

は球形を呈し、口縁部が強く外反している。体部下半にカキメ痕がみられ、焼成は堅く良好である。24は須恵器の体部破片である。外面はタタキメ調整を施している。

25は埋土出土のふいごの羽口破片である。26はカマド上部、27は床上から出土の欠損した角釘である。27の断面形は径7mm前後の方形である。28～32はカマド周辺部出土の鉄滓である。31は長さ10.6cm、幅8cm、厚さ3cm前後のわん型状を呈している。

33～75は木製品類で、焼失のために炭化して原形をとどめるものは少ない。33は床上から出土した櫛で、現存長10.6cm、幅3.7cm、櫛目は精巧なつくりである。34～40・42・57～60・62～64は棒状のもので、断面は円形・方形・長方形状を呈している。47～53は碗の口縁破片である。67・68は杉材を使用した曲げ物である。72・73は根曲がり竹である。

76～80は琥珀であるが、加工痕はみられない。

4号住居跡（第24・25図、写真図版6・22）

＜位置＞調査区中央部から南南西寄りのD3区に位置している。遺構の西方16mに1号住居跡、北東側19mに8号竪穴状遺構がある。＜検出＞表土下位30cmの2層中において、黒色土の広がりによって確認された。＜平面形・規模＞東壁側の一部は耕作等による攪乱・削平のために不詳であるが、平面形は隅丸方形を呈している。規模は4.85m×4.8mである。＜埋土＞黒色土を主体とする6層で構成され、壁際は暗褐色シルトが小ブロックで混入している。埋土下位から床面直上にかけて白頭山・苫小牧火山灰が不連続に堆積をする。

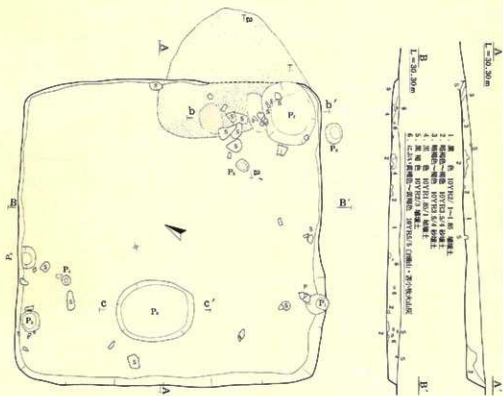
＜壁＞北西・南西壁は床面から垂直に、北東・南東壁は緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は北東壁6.5cm、北西壁17cm、南西壁30cm、南東壁16cmである。＜床＞一部で礫層が露出するものの、ほぼ平坦であり、貼り床は施されていない。カマド周辺部の南東側に堅い踏み締め箇所がみられる。また、北西壁際の床上には炭化材と焼土が散在するが、焼失家屋との断定にはいたらなかった。＜柱穴＞小穴からP₁～P₈が検出され、柱穴は埋土状況や配置からP₁・P₇である。P₁は埋土に壁の崩落土が小ブロックで混入し、P₇は下位に焼土が充満してい

	P ₀	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
直径 cm	37×31	33×29	35×23	15×15	20×18	32×27	100×80	125×98	
深さ cm	40	23	15	8	15	39	25	12	

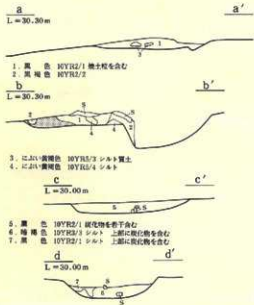
る。平面形は楕円形で、柱根は確認されない。2本しか検出されなかったが、本来は4本柱と推測される。＜土坑＞北東壁の東側コーナーにP₂、中央部西寄りにP₈の2基が検出された。P₇は埋土上部に炭化物を多く含み、カマドに接して位置することからみて貯蔵穴と思われる。P₈の平面形は楕円形で、炭化物を若干混入する。＜周溝＞検出されなかった。

＜カマド＞北東壁の中央部から東寄りに設置されている。著しく攪乱・削平を受けているために燃焼部と袖部を被覆したシルトの一部が遺存するのみである。煙道部と本体部の規模・構造は不明である。燃焼部は壁から30cm内側にあり、径50cm×35cmの楕円形状に焼土が形成されている。層厚は最大で10cmを測る。燃焼部の南側には、袖部に芯材として使用された径15cm～20cm大の垂円礫と凝灰岩が6個ほど倒壊し散在する。芯材の凝灰岩は風化しボロボロに崩れている。一部の垂円礫は火熱を受け、赤褐色を呈している。

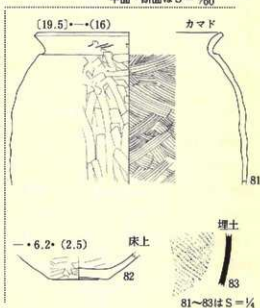
＜遺物＞カマド周辺部の床上と埋土から土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓、炭化穀類等が出土している。土器は甕の破片が大部分を占めており、図化できたのは僅かに2点だけである。81はクロコ不使用の土師器の甕である。頸部に浅い沈線が走り、口縁部は外反をする。口縁部はヨコナデ、体部外面は縦方向にヘラナデ、内面はハケメ調整を施している。82は土師器の底部破片で、体部の調整は内外面ともヘラナデ調整である。焼成は堅く、胎土に多量の小石が含まれている。83は須恵器の甕の体部破片で、外面はタタキメ調整されている。



平面・断面は $S = \frac{1}{60}$



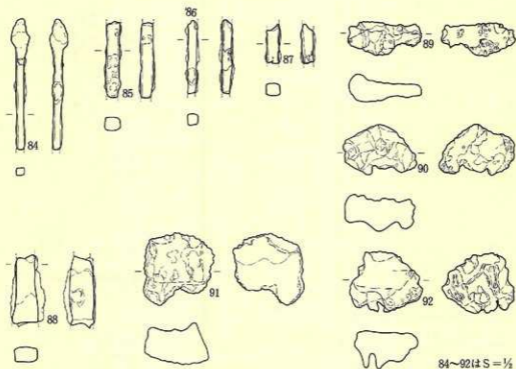
カマド・土坑断面は $S = \frac{1}{40}$



第 24 図 4号住居跡遺構・遺物(1)

鉄製品は5点出土している。84は鉄鍔で端部は欠損している。現存長6.9cm、基部の断面は径4mm角である。85～87は角釘の破片で、いずれも両端部が欠損する。断面形は6mm～8mm前後の方形ないし長方形である。88は器種不明、現存長3.5cm×1.4cm、厚さ8mmである。89～99は鉄滓である。

炭化穀類は北西壁中央部寄りの床上から小塊状で出土したもので、種子同定の結果アワであった。同定の詳細は付編2を参考にされたい。

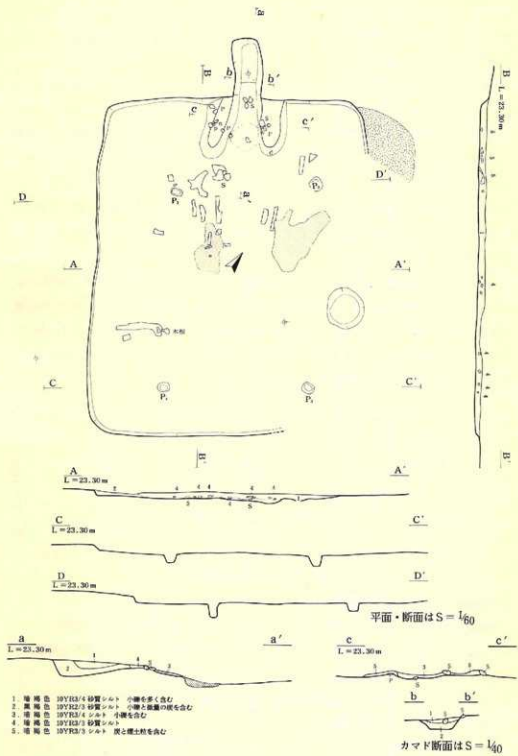


第25図 4号住居跡遺物(2)

5号住居跡(第26・27図、写真図版7・22・23)

<位置>調査区中央部のやや東側D6～D7区にかけて位置し、南方7mに12号住居跡が隣接している。<検出>曝露の上面で確認された。<平面形・規模>北東壁と南東壁側の一部を掘乱・削平されているために平面形は不詳であるが、検出した規模から5.4m×4.3mの隅丸長方形を呈すると推測される。<埋土>黒色～黒褐色土主体の5層に大別され、床直上には白頭山・苫小牧火山灰が小ブロック状で不連続に堆積をしている。

<壁>床面からやや急傾斜に立ち上がり、壁高は4cm～12cmほどである。<床>曝露を少し掘り込んで平坦にしている。<炭化材・焼土>カマド周辺部から遺構中央部にかけての床上には、板状の炭化材と多量の焼土が散在することから焼失家屋と判断される。材の多くは厚さ



第 26 図 5号住居跡遺構

1.5 cm ~ 2.5 cm の板状で占められ、
焼土の厚さは1 cm ~ 2 cm である。

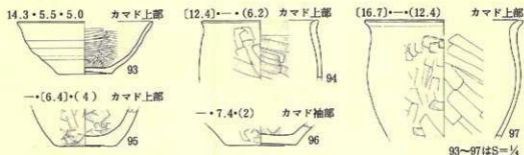
<柱穴> P₁ ~ P₃ の4基が柱穴で、

	P ₀	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
直径 cm	18 × 12	21 × 19	18 × 17	18 × 14	62 × 60	
深さ cm	22	13	18	14	10	

平面形は方形ないし長方形を呈する。<土坑>北東壁の東寄りから P₃ が検出された。埋土は黒色 ~ 黒褐色土の単層で構成される。平面形は円形である。<他の施設>検出されなかった。

<カマド>北西壁のほぼ中央部に設置されている。削平を受けており燃焼部と煙道部・袖部の一部が遺存するのみである。本体部の規模は1.28 m × 98 cm で、袖部は暗褐色シルトで構築されている。煙道部は長さ90 cm、下幅25 cmを測り、緩やかな下り勾配で煙出し部に続いている。本体部と煙道部の構造は不明である。燃焼部は径48 cm × 46 cm の不整形に焼土が形成されている。全体に堅く締まり、最大層厚は8 cm である。支脚は径8 cm × 5 cm、厚さ3 cm の垂円礫を3個使用している。

<遺物>カマド周辺から土師器の環と甕が少量出土している。93は底部切り離し回転系切り無調整の環で、口縁部は外傾し、内面は黒色処理を施している。94 ~ 97はロクロ不使用の甕である。94の口縁部は直立気味に立ち上がり、97は外反している。口縁部はヨコナデ、体部内外面はヘラナデ調整を施している。95・96底部はヘラナデ調整されている。焼成は良好で、胎土に径1 mm ~ 2 mm 程度の小石が多く含まれる。



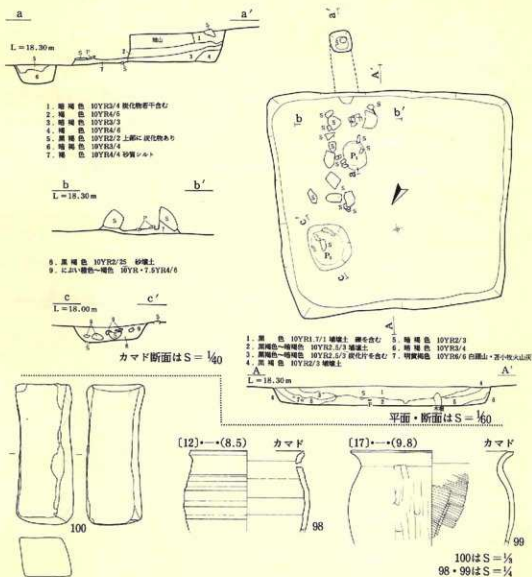
第27図 5号住居跡遺物

7号住居跡 (第28図、写真図版7・23)

<位置>調査区の北東側C10区に位置し、北西方向7 mに11号住居跡が、南西側13 mに10号住居跡が隣接する。<検出>表土下位20 cmの2層中で確認された。<平面形・規模>平面形は隅丸台形を呈し、規模は3.65 m × 3.45 m である。南東壁側に最大長3.8 mを有している。<埋土>7層に大別され、上部は黒色土、下部は白頭山・苫小牧火山灰を小ブロック状に含む黒褐色 ~ 暗褐色土で占められる。

<壁>床面からやや急傾斜で立ち上がり、壁高は24 cm ~ 31 cm である。<床>礫層を20 cm ~ 35 cm ほど掘り込んでいるため

	P ₀	P ₁	P ₂
直径 cm	46 × 35	75 × 65	
深さ cm	18	15	



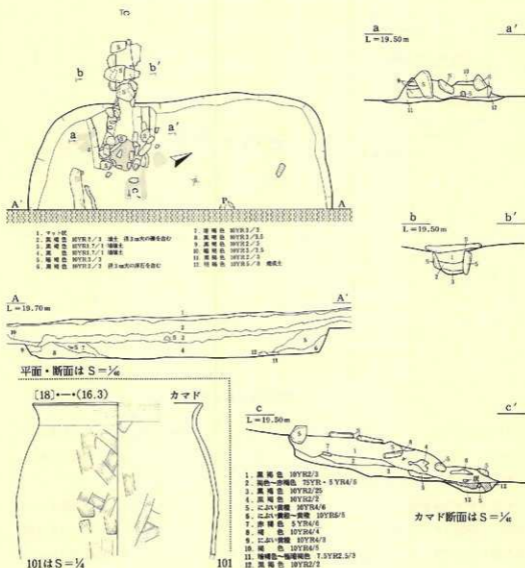
第28図 7号住居跡遺構・遺物

多少の凹凸があるものの、全体に堅く締まっている。〈柱穴〉検出されなかった。〈土坑〉 P_1 ・ P_2 の2基が検出された。平面形はいずれも楕円形を呈している。 P_1 の埋土には炭化材の一部と多量の炭が混入している。〈周溝・他の施設〉検出されなかった。

〈カマド〉南東壁側の中央部東寄りに設置されている。本体部は本根等による攪乱のために崩壊し、使用された芯材や天井材が床上に散乱する。芯材には径20cm〜25cm大の比較的大きめな垂角礫と円礫が用いられ、火熱によって一部は赤褐色に変色をしている。煙道部は長さ1mほどで、径12cm〜18cmの円形ないし楕円形状にくりぬかれている。本体部からほぼ平坦に煙出し部に続く。煙出し部は径35cm×33cm、深さ33cmの方形気味の土坑が掘り込まれてい

る。燃焼部は攪乱され不明である。

〈遺物〉カマド周辺部から土師器少量と砥石1点を出土している。98はロクロ成形の土師器の甕である。口頸部に径1cm大の補修用の穿孔がある。99はロクロ不使用の甕で、口縁部は外反し、口唇部に浅い沈線が巡っている。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラナデ、内面はハケメ調整を施している。98の胎土には径1mm大の小石が多く含まれる。100は埋土から出土した砥石で、長さ11.2cm×4.5cm、厚さ3.1cmを測り、4面が使用されている。石質は流紋岩である。



第29図 9号住居跡遺構・遺物

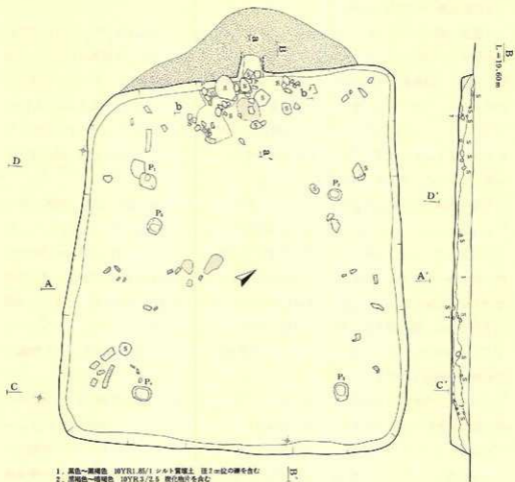
9号住居跡（第29図、写真図版9・23）

<位置>調査区中央部から北北東側のD9区に位置しており、北西方向1.9mに10号住居跡が近接する。<検出>表土下位30cm～35cmの2層中において、黒色土の落ち込みによって確認された。<平面形・規模>遺構の3分の2が東側調査区域外に統しているために、平面形・規模の詳細は不明である。検出された北北東-南南西辺は4.8m、西北西-東南東辺は1.75mを測り、コーナーは隅丸を呈している。<埋土>遺構の中央部は黒色土で占められ、壁際は暗褐色土と径3mm大の南部浮石を含む黒褐色土が堆積している。床直上付近には炭、焼土粒が多く混入している。火山灰の堆積は認められなかった。

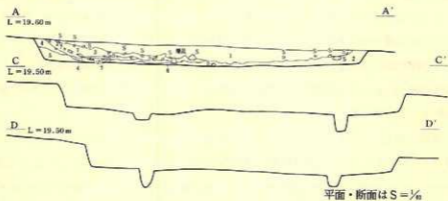
<壁>床面から急傾斜に立ち上がっている。壁高は30cm～40cmである。<床>礫層を10cm～15cm掘り込んで床面としているために、多少凹凸がある。やや全体に堅く締まっている。貼り床は施していない。<炭化材・焼土>カマド周辺部の床面直上には、厚さ1.5cm～4cmの板状の炭化材と多量の焼土が数箇所に散在することからみて、焼失家屋と判断される。焼土の層厚は1cm～2.5cmである。<柱穴>1基検出されたが、一部は調査区域外に続くことから詳細は不明である。検出規模から径22cm前後の円形状を呈すると推測される。深さは38cmで、埋土下位に砂が多く混入する。調査区域外にも数基柱穴が存在すると思われる。<溝溝・他の施設>検出されなかった。

<カマド>西北西壁側の南西コーナー寄りに設置されている。一部に崩落がみられるものの遺存状態は比較的良好である。本体部の規模は1.05m×1.00mを測る。両袖部は長さ15cm～30cm、幅5cm～20cm、最大厚15cmの垂角礫を4～5個芯材に用い、その上をいぶい黄褐色シルトで被覆している。天井部の構造は崩落しているため不詳であるが、燃焼部側上面に垂角礫を数個散在することから一部礫を使用したと推測される。煙道部は長さ1.02m、最大幅20cmで側壁と天井部に礫を使用した掘り込み式である。両側壁は長さ15cm～35cm、幅5cm～13cm、厚さ5cm前後の垂角礫を5個垂直に据えている。天井部は長さ30cm～58cm、幅25cm、厚さ5cmの垂角礫2個で構築している。煙道は燃焼部から緩やかな上り勾配で煙出し部へと続いている。埋土下位には炭と焼土塊が多く堆積をし、側壁も火熱による赤褐色変化が認められる。燃焼部は径50cm×40cmの楕円形状に焼土が形成されている。焼土の層厚は5cm～10cmで、比較的堅く締まっている。

<遺物>埋土とカマド周辺の床上から土器破片が少量出土したのみで、図化できたのは1点である。101はロクロ不使用の甕で、口縁部はやや外反気味に立ち上がっている。口縁部はヨコナデ、体部内外面はヘラナデ調整を施している。焼成は堅く、胎土に多量の小石を含んでいる。



1. 黒色～暗褐色 10YR1.5/1 シルト質硬土 厚2m位の層を含む
2. 灰褐色～暗褐色 10YR3/2.5 炭化物片を含む
3. 暗褐色 10Y2.5/3.5
4. 暗褐色 10Y2.5/4 硬土
5. 灰褐色～暗褐色 10YR3/2.5 硬硬土
6. 褐色 10YR4/5
7. 暗黄褐色 10YR5/6 白磁山・芝小段火山灰



第30図 10号住居跡

10号住居跡 (第30・31図、写真図版9・23)

<位置>調査区中央部から北東側のC9区に位置している。南東方向1.9mには9号住居跡が近接する。<検出>表土下位25cm~30cmの2層中から礫層上面において、黒色~黒褐色土の広がりによって確認された。<平面形・規模>平面形は隅丸台形を呈し、規模は6m×5.3mである。北東壁側が最大であり辺の長さは5.8m、北西壁側が最小で長さは4.6mである。<埋土>黒色土を主体とする7層に大別され、上部は黒色~黒褐色土、下部は小礫混じりの黒褐色~暗褐色土で占められる。床直上には小ブロック状の白頭山・苫小牧火山灰が不連続に堆積をしている。

<壁>床面から急傾斜で立ち上がっている。壁高は北東壁22cm、南東壁35cm、南西壁34cm、北西壁28cmを測る。<床>礫層を掘り込んで床面としているために、多少の凹凸がある。全体は強く締まっている。<炭化材・焼土>南西壁側寄りの床直上とカマド周辺部には厚さ1cm前後の板状の炭化材、炭、焼土が多量に散在することから、本遺構は焼失家屋と判断される。<柱穴>小穴が5基検出され、埋土の様相と位置的にP₁~P₅が柱穴である。平面形は隅丸長方形ないし楕円形状で、柱根は確認されなかった。埋土は黒褐色土の単層で、砂礫を多く含んでいる。

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
直径 cm	28 × 22	22 × 19	30 × 22	30 × 22	25 × 22
深さ cm	28	18	27	10	8

<周溝・他の施設>検出されなかった。

<カマド>北西壁の中央部南西寄りに設置されているが、本体部は木根等による攪乱のため崩壊し、煙道部の大部分も削平を受けていることから詳細は不明である。遺存する燃焼部は径35cm×33cmの不整形形状に焼土が形成されている。層厚は最大で2cmを測る。焼土の周辺部には袖部の芯材として使用された径10cm~40cm大の凝灰岩と亜円礫が多数散在している。袖



1. 埋土色 MYR3/3 シルト
2. 埋土色 MYR3/3 段を多量に含む
3. 埋土色 MYR4/4 シルト 段を多量に含む
4. 埋土色 MYR3/2 シルト質土 上面に炭化物を多量に含む



第31図 10号住居跡遺構・遺物

部のシルトは流出し、僅かに下端が残っている。煙道部の構造は不明である。

<遺物>カマド袖部周辺と床上から土師器、須恵器が少量出土している。102～104はロクロ不使用の土師器の甕、105は須恵器の甕である。102の口縁部は強く外反し、103は外傾している。口縁部はヨコナデ、体部内外面ともヘラナデ調整を施している。104の底部はヘラナデ調整されている。105は甕の体部破片で、外面はタタキメ調整である。

11号住居跡（第32・33図、写真図版10・11・24）

<位置>調査区の北東側B10～C10区にかけて位置し、南東方向7mに7号住居跡が、北西側12mに1号溝跡が隣接する。<検出>表土下位10cm～20cmの2層中において確認された。<平面形・規模>平面形は北東壁側に最大6.1mとなる隅丸台形で、規模は6.2m×5.7mを呈する。<埋土>黒色土と黒褐色土を主体とする5層に大別される。壁際の床直上には小ブロック状に白頭山・苫小牧火山灰が堆積をしている。下位には焼土粒が少量混入する。

<壁>床面からやや急傾斜で立ち上がり、壁高は15cm～60cmである。比較的北西壁側は遺存が良好である。<床>ほぼ平坦で、カマド周辺部に堅い踏み締め箇所がみられる。<炭化材・焼土>各壁際の床上5cmから床直上にかけて多量の炭化材、炭、焼土が散在することからみて、本遺構は焼失家屋である。北東壁の北側コーナー寄りの床直上には、長さ60cm～80cm、幅10cm、厚さ3cm～5cmの板材が数枚敷かれている。板材のほかに径4cm大の垂木材も散在している。焼土は不整形に厚さ2cmほどで堆積する。<柱穴>小穴は6基検出され、位置的にP₁～P₆が柱穴である。P₃・P₄の2基は南東壁寄りに位置している。平面形は楕円形を基調としている。

柱根は確認されなかった。

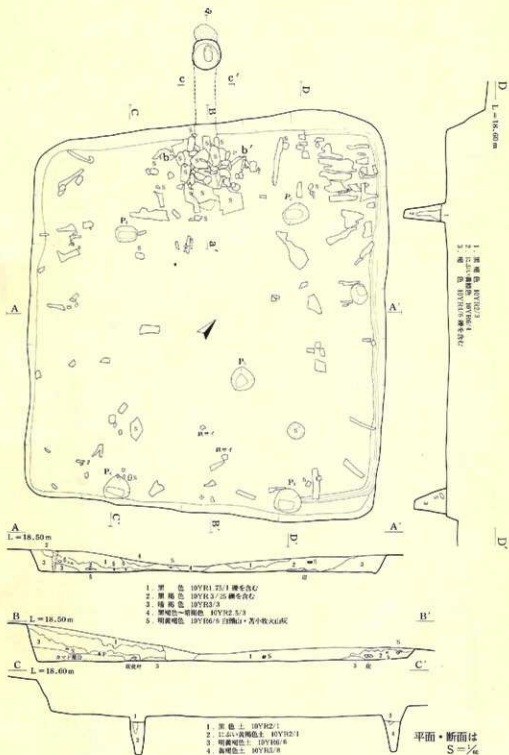
<周溝>北東壁際と北西・南東壁際の一部において、

	P ₆	P ₅	P ₄	P ₃	P ₂	P ₁	P ₁
直径 cm	36×24	40×30	42×38	42×35	37×35	32×25	
深さ cm	62	65	52	58	12	31	

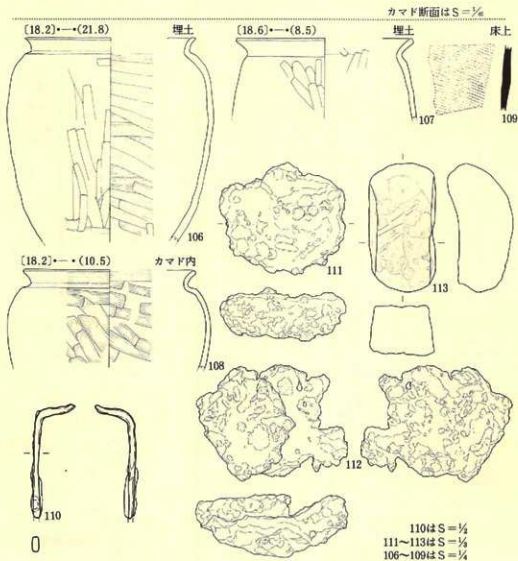
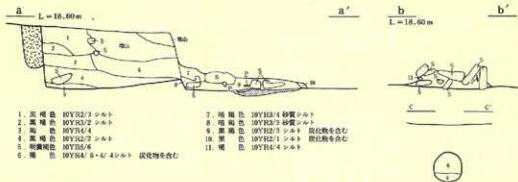
幅10cm前後、深さ5cm～9cmで巡っている。<他の施設>検出されなかった。

<カマド>北西壁の中央部に設置されている。本体部は崩壊しており、被覆したシルトの大部分は流出し遺存しない。規模は1.25m×80cmで、両袖部は長さ20cm～34cm、幅10cm～15cm大の凝灰岩を4個ほど芯材に据えている。天井部は長さ50cm、幅30cm前後の凝灰岩を2個使用しているが折れて燃焼部上面に倒壊する。燃焼部は径65cm×40cmの楕円形状に焼土化され、層厚は最大7cmを測る。煙道部は長さ1.35mで、径30cmの円形状にくりぬかれ、緩やかな下り勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部は径50cm×46cm、深さ64cmの円形状の土坑が掘り込まれている。埋土下位には長さ25cm、幅12cmの垂円礫が埋設していた。燃焼部寄りの煙道内の壁は、火熱を強く受けて赤褐色に変化し、堅く締まっている。

<遺物>床上と埋土下位から土師器、須恵器、磁石、鉄製品、鉄滓等が少量出土している。



第32图 11号住居跡



第 33 図 11 号住居跡遺構・遺物

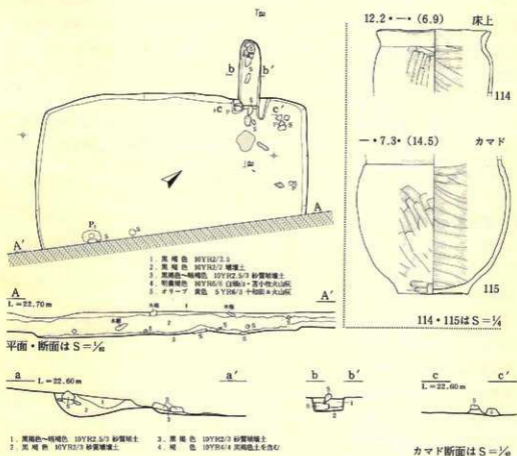
106～108はロクロ不使用の土師器の甕で、底部は欠損する。口縁部は106が外傾し、107・108は外反している。108は頸部に浅い沈線が走り、胴部はやや球胴形を呈する。いずれも口縁部はヨコナデ、体部内外面はヘラナデ調整を施している。109は須恵器の甕の体部片である。

110は床上から出土の甕で端部は欠損している。現存長6cm、断面は8mm×3mmの長方形である。111・112はわん型状の鉄滓で長さ10cm～12cm、幅9cm、厚さ4cm～5cmである。

113は床上出土の長さ10.3cm、幅5.3cm、厚さ4cmの軽石を転用した砥石である。4面が良く使用されている。

12号住居跡（第34図、写真図版12・24）

<位置>調査区中央部の南東側のD6区に位置し、北側7mには5号住居跡が隣接している。<検出>表土下位25cm～30cmの2層中において、黒色土の広がりによって確認されたものである。<平面形・規模>耕作等による削平を受け、遺構の約半分が南東側の調査区域外に



第34図 12号住居跡遺構・遺物

統しているために、詳細な平面形・規模は不明である。検出された北東-南西辺は4.3 m、北西-南東辺は2.2 mを測り、コーナーはやや隅丸である。検出した辺の規模から径4.3 m～4.5 m前後の方形ないし長方形を呈すると推測される。〈埋土〉黒褐色土と暗褐色土の3層で構成され、埋土下位から床にかけて白頭山・苫小牧火山灰と十和田A火山灰が小ブロックで堆積をしている。埋土の上半部は乾燥が著しい。

〈壁〉床面から直に立ち上がっており、壁高は北東壁16 cm、北西壁11 cm、南西壁6 cmを測る。〈床〉雑層中にあるため、多少の凹凸が見られる。また、カマド周辺部と北東壁寄りの床には炭化材が散在しているが、量も僅かであることから焼失家屋とは断定できない。〈柱穴〉南西壁寄りに1基検出された。規模は径28 cm×20 cm、深さ8 cm、平面形は楕円形である。調査区域外にも数基柱穴が存在すると思われる。〈周溝・他の施設〉検出されなかった。

〈カマド〉北西壁の北東コーナー寄りに設置されている。大部分は攪乱・削平を受け、煙道部下部和燃焼部が遺存するのみである。煙道部は長さ90 cm、最大幅34 cmを測り、緩やかな下り勾配で煙出し部へと続いている。煙出し部側には径10 cm～15 cm、厚さ2 cm～8 cm大の円礫が7個充填されていた。煙道部の構造は不明である。燃焼部は径30 cm×25 cmの不整形を呈し、最大厚3 cmの焼土が形成されている。支脚は燃焼部と煙道部の中間に径15 cm×10 cm、厚さ5 cmの垂円礫を1個使用している。

〈遺物〉カマド周辺部と床から土師器の甕が2点出土している。いずれもロクロ不使用である。114は口縁部～体部の破片で、口縁部は外傾する。調整は口縁部がヨコナデ、体部内外面ともヘラナデを施している。115は口縁部を欠損する。体部はやや球形状を呈し、内外面ヘラナデ調整である。胎土には径1 mm～2 mm大の小石が多く含まれている。

3. 遺構外の出土遺物

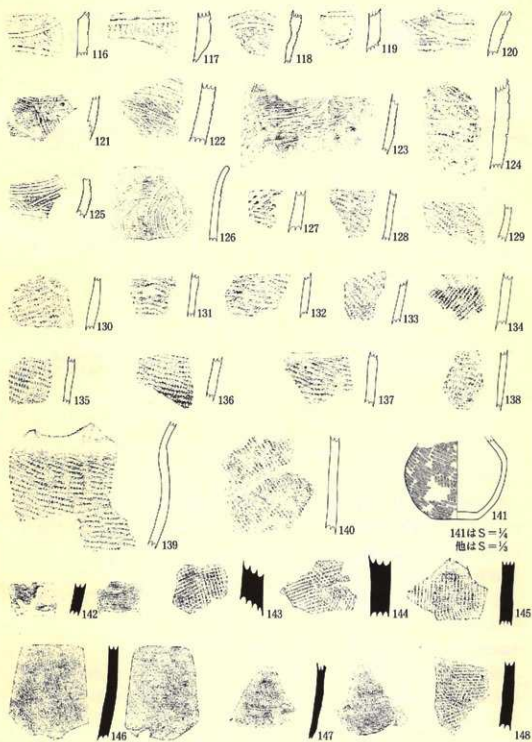
遺構外からは縄文土器、須恵器、土師器、鉄滓、銭、磁石等が出土している。数量的には少なく、大部分は破片で占められている。

(1) 縄文土器 (第35図116～141、写真図版25)

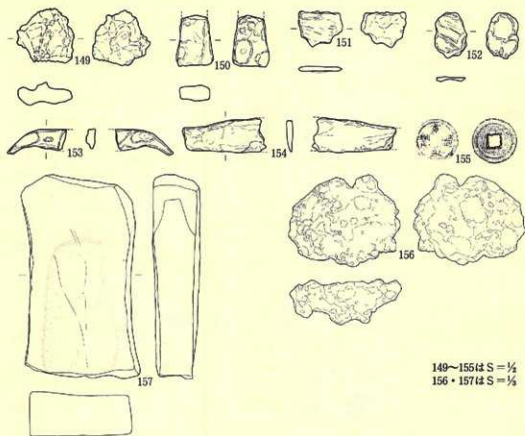
土器は文様や施文のあるものと粗製土器に大別されるが、破片が多いことから器形の全容は不明である。出土量も僅少であることから第I・II群に大別した。

第I群土器 (第35図116～127)

本群は主として沈線が施文されるものである。117は沈線下位に刺突が施されている。118～120は平行沈線文である。126は深鉢の口縁破片である。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、5条の平行する沈線で曲線文を描いている。121・123と同一固体である。127網目状文が施される。縄文時代後期に属するものと推測される。



第35図 遺構外出土遺物(1)



149～155はS=1/2
156・157はS=1/4

第36図 遺構外出土遺物(2)

第Ⅱ群土器 (第35図128～141)

本群は粗製土器を一括したものである。139は深鉢の口縁部下半～体部破片で、口縁部は無文で、体部に単節斜縄文(LR)を施文している。141は口縁部が欠損した小型の甕である。体部は単節斜縄文(RL)を施文しており、煤が付着する。

(2)須恵器 (第35図142～148、写真図版25)

142～148は破片のため器種が不明である。143～145・148の体部外面はタタキメ調整が施されている。

(3)鉄製品・銭・鉄滓 (第36図149～156、写真図版26)

鉄製品は6点出土している。154は両端部を欠損する刀子で、現存長4.4cm、幅1.7cm、厚さ3mmを測る。他の器種は不明である。155は新寛永通寶、156はわん型状の鉄滓である。

(4)砥石 (第36図157、写真図版26)

157は長さ16.3cm、幅10.4cm、厚さ3.8cmの砥石で、4面が良く使用されている。石質は流紋岩である。

V. まとめ

本遺跡から発見された平安時代の竪穴住居跡と遺物を主体に、若干の補足を加えまとめる。

1. 陥し穴状遺構

等高線に沿うように単独で1基検出されている。平面形は溝状を呈するタイプで、長軸径は3.8 mを測る。短軸方向の断面形はU字形である。深さは80 cm前後であり、埋土の堆積状況は開口部から流れ込みと壁崩落土による自然堆積の様相を示している。構築時期を決定する遺物は出土していないが、類例等から縄文時代に比定される。

2. 土坑

大小合わせて6基検出され、平面形は楕円形を基調とするものが4基、不整形、不整形と多様である。規模は径70 cm～1.97 m、深さ20 cm～45 cmと大小の差異が認められる。竪穴状遺構と重複するのは1号～4号土坑で、いずれも切っていることから土坑の方が新しい。遺物の出土はなく時期や性格等は不詳である。

3. 焼土遺構

緩斜面上から3基検出している。規模は23 cm～95 cm、厚さ2 cm～10 cmを測り、いずれも現地性のものである。時期は不明である。

4. 溝跡

調査区の北側に長さ22.5 m、幅2.2 m、深さ5 cm～10 cmの規模で検出されているが、一部は調査区域外に続くために詳細は不詳である。埋土の堆積状況からみて近代のものと推測される。

5. 竪穴状遺構

3棟検出されている。調査区域外に続く1棟を除く平面形は、隅丸方形と長方形を呈している。床面積の規模は7 m²～7.8 m²で、平安時代の竪穴住居跡よりも小規模となっている。埋土中には白頭山・苫小牧火山灰や十和田a火山灰の堆積は見られない。2棟は平安時代の竪穴住居跡に隣接して立地するものの、性格や時期を断定できる資料の出土はない。

6. 平安時代の竪穴住居跡

<立地>

検出された10棟の住居跡は、丘陵地の北東側斜面上の標高18m～33mに立地している。調査区の北東側と南西側では約15mの比高差を生じる。住居跡は北東側(標高18m～20m)に4棟、中央部(標高22m～23m)に2棟、南西側(標高30m～33m)に4棟分布し、3地域に分散している。

<平面形・規模>

平面形は調査区域外に続いたり、削平されている住居跡を除くと隅丸長方形2棟、隅丸方形3棟、隅丸台形3棟と多様を呈している。方形を基調とするものが卓越するようである。

長辺の規模別分布は3m～4m2棟、4m～5m2棟、5m～6m2棟、6m～6.2m2棟、不明2棟である。長辺が5m以上の住居跡が多い点が注目される。なお、長辺の規模は上端での計測値である。

床面積は壁の下端をカマドや周溝を無視して計測したものである。床面積別の棟数は11㎡前後2棟(小型)、19㎡～22㎡4棟(中型)、30㎡～36㎡前後2棟(大型)に区分される。中型の住居跡を中心とする集落構成である。また、地形的に大型の住居跡は遺跡の北東側地域に立地している。不明な2棟を除いた床面積の平均は21.2㎡である。

<埋土>

埋土に堆積する2種類の火山灰について述べる。白頭山・苦小牧火山灰と十和田a火山灰は、埋土下位から床上にかけレンズ状ないし小ブロックで点在する例が多い。2種類の火山灰を含むのは3号住居跡の1棟で、前者だけのものが7棟である。火山灰の分析・同定は奈良教

表3 平安時代住居跡・竪穴状遺構一覧表

No.	住居跡名	平面形	規模(m)	床面積(㎡)	壁高(m)	柱穴数	カマドの位置	煙道部	埋土中の火山灰		焼失
									白頭山	根田	
1	1号住	隅丸長方形	4.7×4.3	19.3	5～29	—	北西壁中央部	不明	○	—	—
2	2号住	隅丸方形	3.4×3.3	11.0	19～25	—	北東壁南東隅寄り	くりぬき	○	—	—
3	3号住	隅丸方形	5×4.8	19.6	14～42	4	西壁中央部	くりぬき	○	○	○
4	4号住	隅丸方形	4.8×4.8	21.8	6.5～30	2+a	北東壁中央東寄り	不明	○	—	—
5	5号住	隅丸長方形	5.4×4.3	19.3	4～12	4	北西壁中央部	不明	○	—	○
6	7号住	隅丸台形	3.65×3.45	11.5	24～31	—	南東壁中央東寄り	くりぬき	○	—	—
7	9号住	不明	(4.8×1.7)	(7.9)	30～40	1+a	西北西壁南東隅寄り	掘り込み	—	—	○
8	10号住	隅丸台形	6×5.3	30.7	22～35	4	北西壁中央南西寄り	不明	○	—	—
9	11号住	隅丸台形	6.2×5.7	36.4	15～60	4	北西壁中央部	くりぬき	○	—	○
10	12号住	不明	(4.3×2.2)	(8.5)	6～16	1+a	北西壁北東隅寄り	不明	—	—	—
11	6号竪穴状	隅丸方形	2.85×2.7	7.0	18～24	—	—	—	—	—	—
12	8号竪穴状	長方形	4.7×3.1	7.8	5～20	—	—	—	—	—	—
13	13号竪穴状	不明	(2.75×1.15)	(1.3)	23～30	—	—	—	—	—	—

育大学の三辻利一氏に依頼した。詳細は付編1に掲載してある。

<壁>

削平されたり、流出している住居跡が多い。壁高は5cm～60cmの範囲にあり、総じて床面から急傾斜に立ち上がっている。

<炭化材・焼土>

炭化材や焼土を散布する焼失家屋は3・5・9・11号住居跡の4棟である。上屋構造の様相を確認できるだけの炭化材は検出されていない。炭化材の断面形をみると厚さ1.5cm～4cm大の板状の割材が多く、11号住居跡床には敷板がされている。また、垂木材や竹も一部出土している。炭化材の樹種は鑑定の結果、大部分が栗であった。

<周溝>

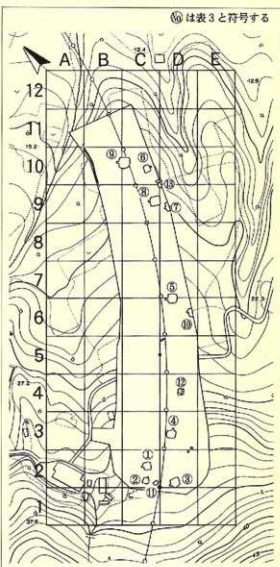
壁際の一部を巡るものが3・11号住居跡から検出されている。規模は一律ではなく幅10cm～18cm、深さ3cm～9cmほどである。

<柱穴と柱穴配置>

柱穴が検出されたのは3・4・5・9・10・11・12号住居跡の7棟で、この内柱穴配置を確認できたものは4棟である。4本柱を基調とするもので、正方形と長方形に近い配置を示している。2本はいずれかの壁側に寄る。

<カマド>

削平や攪乱を受け一部不詳なものが多い。カマドの位置は北西壁5棟、北東壁2棟、西壁・南東壁・西北西壁が各1棟である。壁の中央部に設置されているのが4棟、他はコーナー側に片寄る傾向を示している。カマド本体部が原形を保っている例は少なく、芯材として使用された礫が崩壊し散在している。芯材と天井部には亜角礫・亜円礫・凝灰岩等が使用されており、その上をシルトで被覆し構築している。凝灰岩は加工されているものが多い。



遺構の位置

煙道部は9号住居跡が側壁と天井に礫を使用した。掘り込み式で、他の遺構がくりぬき式と不明なものである。上り勾配型2棟、ほぼ水平型1棟、下り勾配型4棟、削平のため不明が3棟である。支脚は2・5・12号住居跡で検出され、土製支脚や円礫を使用している。このように住居跡は規模、カマドの設置位置、煙道部のつくり方、柱穴配置等の構造的な変化がみられる。

7. 平安時代の土器と遺物

住居跡からは、土師器の甕を主体に坏・須恵器が少量出土している。土器は33点掲載したが完形品がなく、器形の全容は不詳であることから形態の細分は行わない。

<土師器の坏>

ロクロ使用のものが破片で2点(3・5号住居跡)出土している。内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施したもので、底部切り離しは回転糸切り無調整である。

<土師器の甕>

ロクロ使用のものは1点(7号住居跡)出土したのみで、他はロクロ不使用で占められる。後者の口縁部は全体的に短く、外反する傾向がみられる。また、頸部に浅い沈線が巡るものもある。口縁部はヨコナデ調整、体部はヘラナデ調整を主に施している。胎土に小石を含むものが多く、器形は大・小に大別できる。

<須恵器>

須恵器は1～4・10・11号住居跡から甕の体部破片が、3号住居跡から坏の破片と長頸壺が出土している。甕は大型の器形の破片も含まれている。

<土器の年代>

住居跡の土器組成は、土師器のロクロ不使用の甕を基調としており、坏の出土数は僅少である。須恵器は破片で出土するものが多い。全般に土師器の甕は口縁部が短くなる傾向を示している。遺物量にも偏りがあるために時期区分は不詳であるが、ロクロ使用の内黒の坏との共伴からみて、時期は10世紀から11世紀の範囲におさまるものと推測される。

<その他の遺物>

琥珀は3号住居跡から原石と破片を出土しているが、工房跡とは確認できない。鉄器は角釘・鉋・鉄錐等が少量出土している。本遺跡では鍛冶工房を兼ねた住居跡は検出されていないが、6棟からわん形の鉄洋が出土し、周辺での鉄器生産が行われていたことが指摘される。また、焼失家屋から椀形の木製品や曲げ物が多く出土しており、土師器の坏に代えて木製品の使用が増加していたことがうかがわれる。鉄洋の金属学的解析は付編3に掲載してある。

付編 2

明神遺跡 4 号住居跡出土種子同定報告

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、明神遺跡 4 号住居跡の床上から出土したものであり、炭化種子塊として出土した。試料の保存状態は比較的良好であり、外形の特徴も残っているようであった。時代は平安時代と考えられている。同定した試料はシャーレに入れてある。

2. 方法

種子同定方法は、実体顕微鏡を用いて観察した。また、写真図版(図 1)も作製した。

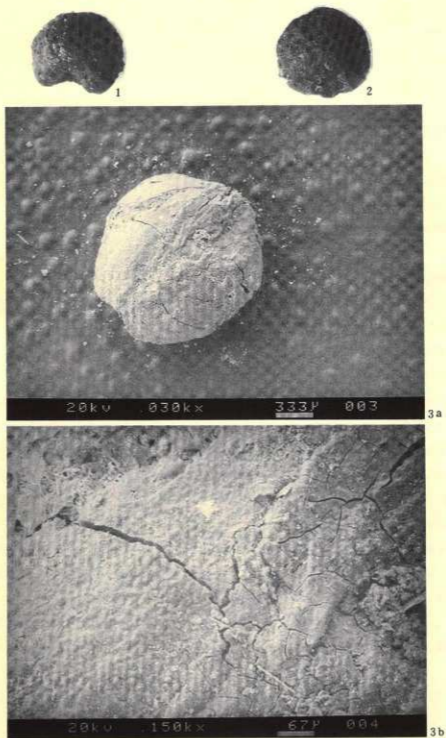
3. 結果・考察

試料は、炭化種子塊として産出した。その組成はアワのみと考えられるものであった。他の栽培植物が出土していないため、大型植物遺体のみからでは当時の農作物や食糧事情及び植生などを推定することは困難である。しかしながら、アワは重要な作物、食糧の一部であったことがうかがえる。以下に種類の特徴を述べる。

・アワ (*Setaria italica* BEAUVOIS) 穎果 (多量) 図 1 の 1・2・3

穎果(主に胚乳)は炭化し、黒色。ほぼ球形。直径 1.4 mm 程度。胚の部分が損失している個体が多かった。また、本遺跡から得られた個体は穎の部分は損失している。

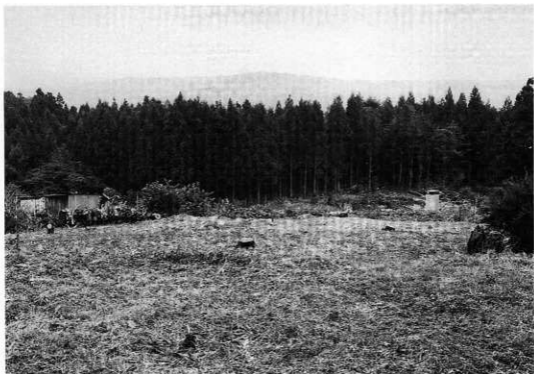
アワ・ヒエを炭化胚乳のみで区別することは困難であるが、他の遺跡から本標本と同様な産出をした中に、穎が付いたままのものが存在した。その穎の特徴はヒエではなくアワであった。そこで、本標本と外形の特徴がそのアワと似るため、ここではアワとする。



1・2. アワ (×10), 3. アワの電子顕微鏡写真 (スケールは写真の下に示した)

図1 4号住居跡出土アワの実体・電子顕微鏡写真

写 真 图 版



調査前近景（南側から）



試掘トレンチ



試掘

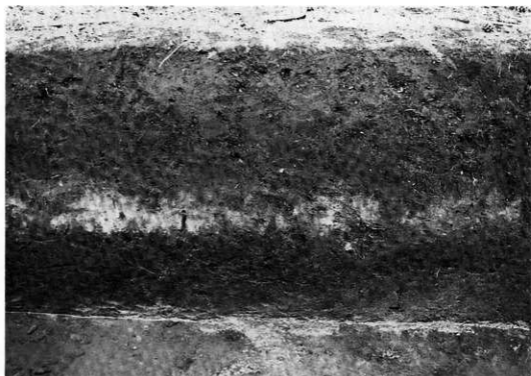


作業風景

写真図版1 調査前近景・作業風景



D5b調査区



C7a調査区

写真図版2 土層断面



完掘



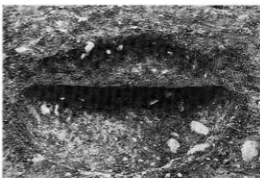
埋土断面



埋土断面



カマド断面



土坑埋土断面

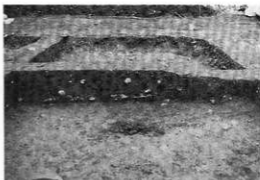
写真図版3 1号住居跡



完掘



埋土断面



埋土断面



カマド断面



カマド煙道断面

写真図版 4 2号住居跡



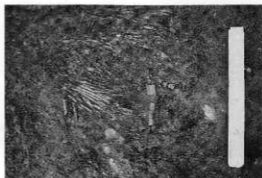
埋土断面



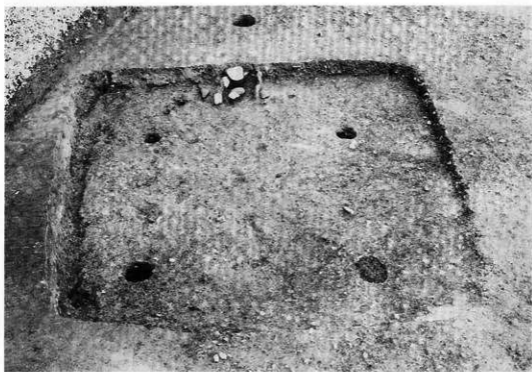
埋土断面



炭化材出土状況



炭化物出土状況



完掘

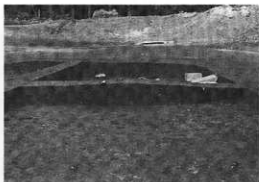
写真図版 5 3号住居跡



完掘



埋土断面



埋土断面



栗出土状況

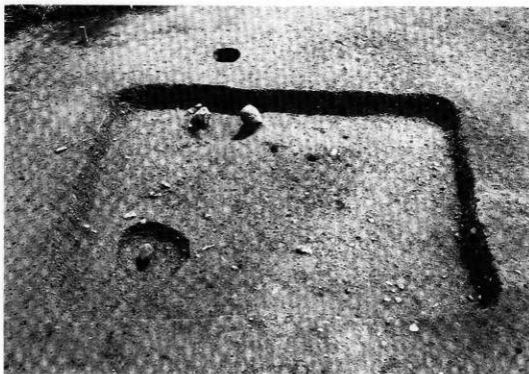


土坑埋土断面

写真図版 6 4号住居跡



5号住居跡完掘



7号住居跡完掘

写真図版7 5号・7号住居跡



遺物出土状況



カマド検出状況

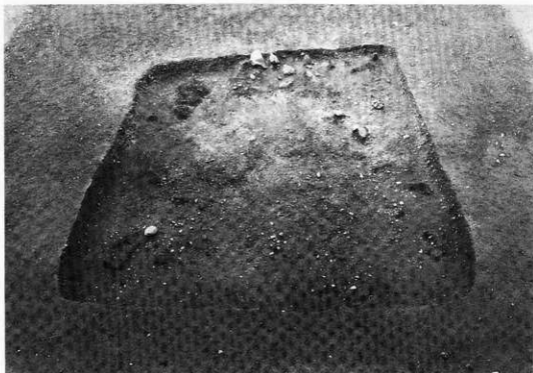


カマド埋土断面

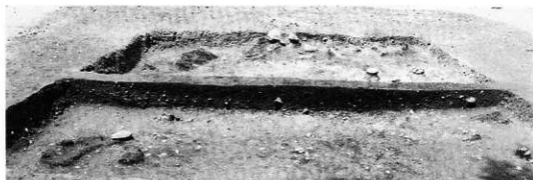


カマド完掘

写真図版 8 9号住居跡



炭化材出土状況



埋土断面



カマド断面

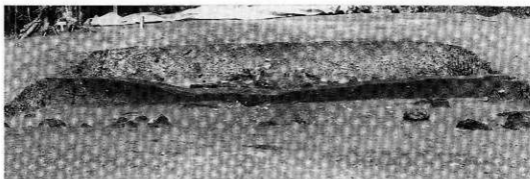


カマド断面

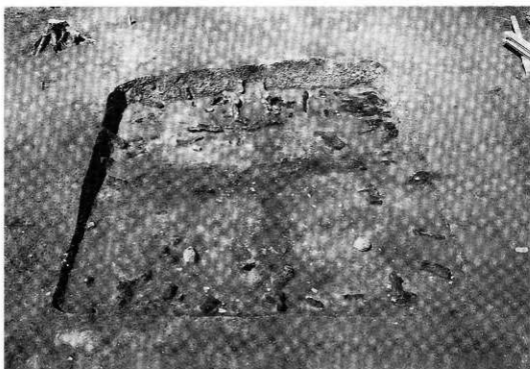
写真図版9 10号住居跡



埋土断面



埋土断面



炭化材出土状況

写真図版 10 11号住居跡(1)



炭化板材出土状況



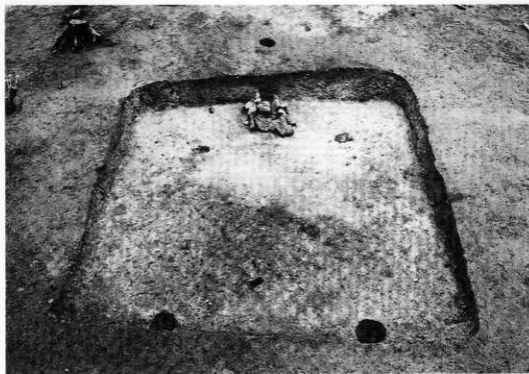
炭化板材出土状況



カマド断面



柱穴埋土断面

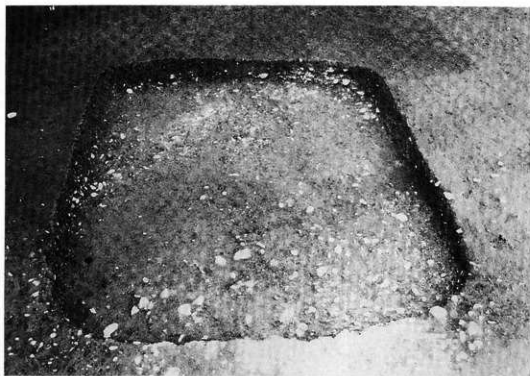


完掘

写真図版 11 11号住居跡(2)

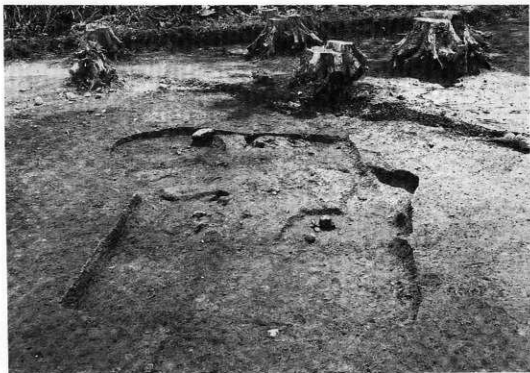


12号住居跡完掘



6号竪穴状遺構完掘

写真図版 12 12号住居跡・6号竪穴状遺構



8号竖穴状遺構完照



13号竖穴状遺構完照



8号竖穴状遺構埋土断面

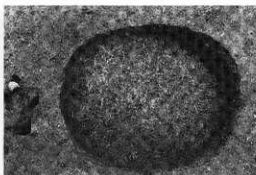


13号竖穴状遺構埋土断面

写真図版 13 8号・13号竖穴状遺構



1号土坑完掘



2号土坑完掘



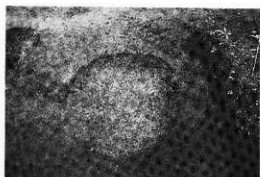
1号土坑埋土断面



3号土坑埋土断面



3·4号土坑完掘



5号土坑完掘

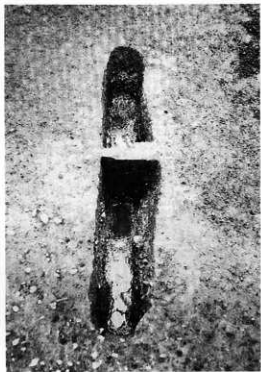


6号土坑埋土断面

写真图版 14 土坑



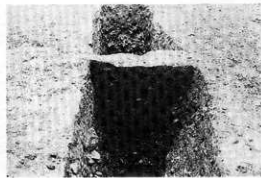
1号溝跡発掘



1号陥し穴状遺構



埋土断面



埋土断面



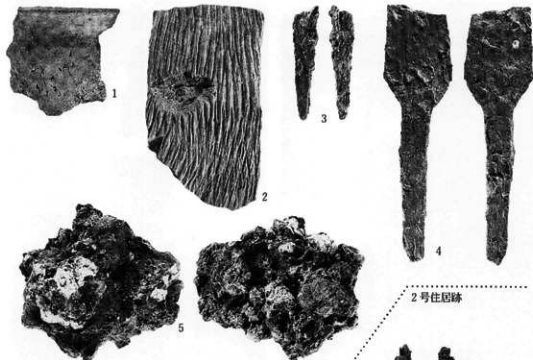
1号焼土断面



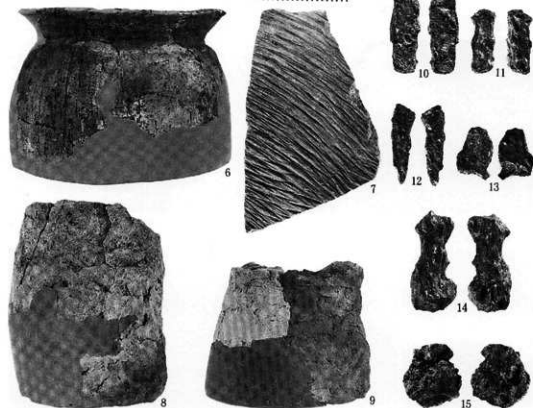
2号焼土断面

写真図版 15 溝跡・陥し穴状遺構・焼土遺構

1号住居跡

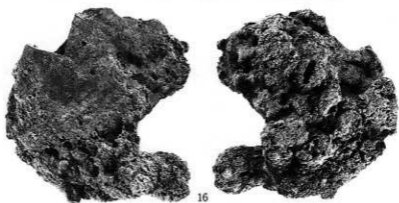


2号住居跡

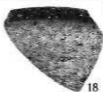


写真図版 16 住居跡出土遺物(1)

2号住居跡

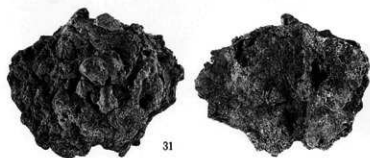
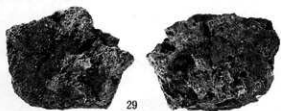
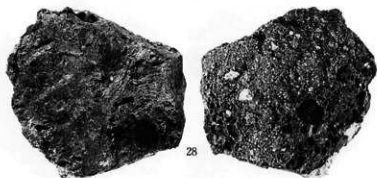


3号住居跡



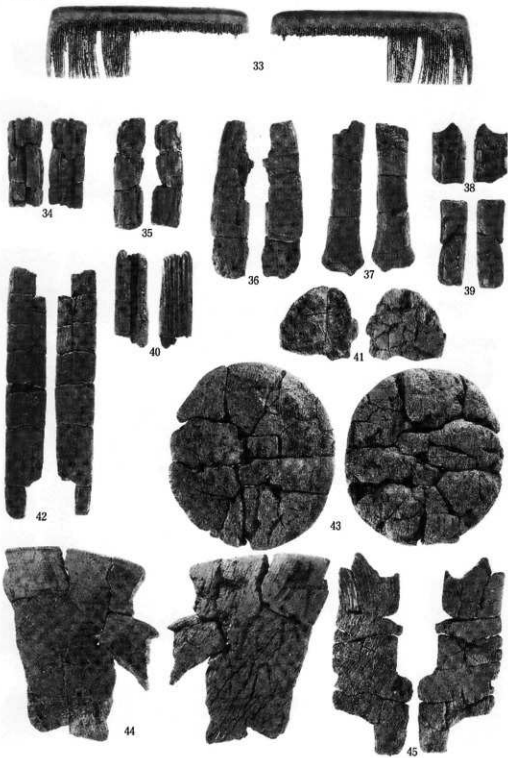
写真図版 17 住居跡出土遺物(2)

3号住居跡



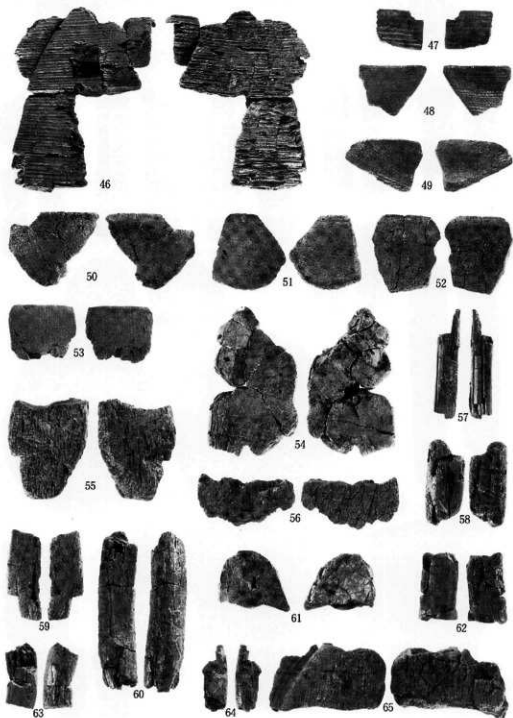
写真図版 18 住居跡出土遺物(3)

3号住居跡



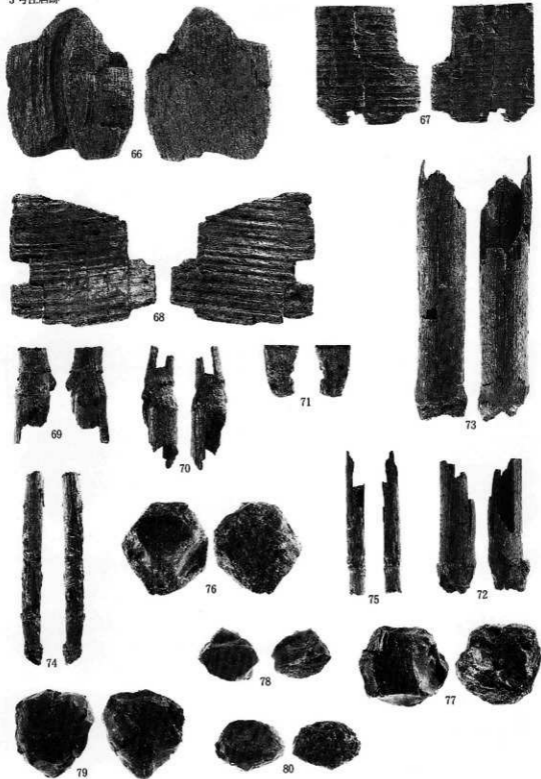
写真図版 19 住居跡出土遺物(4)

3号住居跡



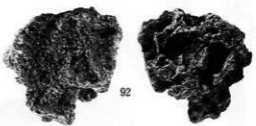
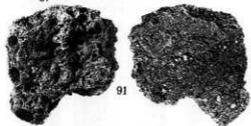
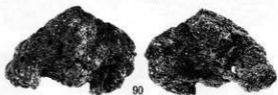
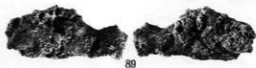
写真図版 20 住居跡出土遺物(5)

3号住居跡

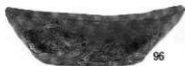


写真図版 21 住居跡出土遺物(6)

4号住居跡



5号住居跡



写真図版 22 住居跡出土遺物(7)

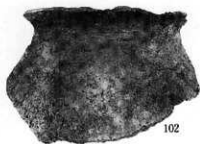
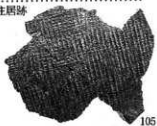
5号住居跡



9号住居跡

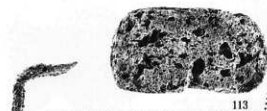
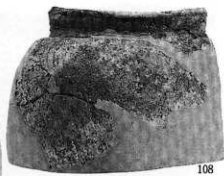


10号住居跡

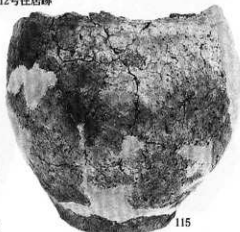


写真図版 23 住居跡出土遺物(8)

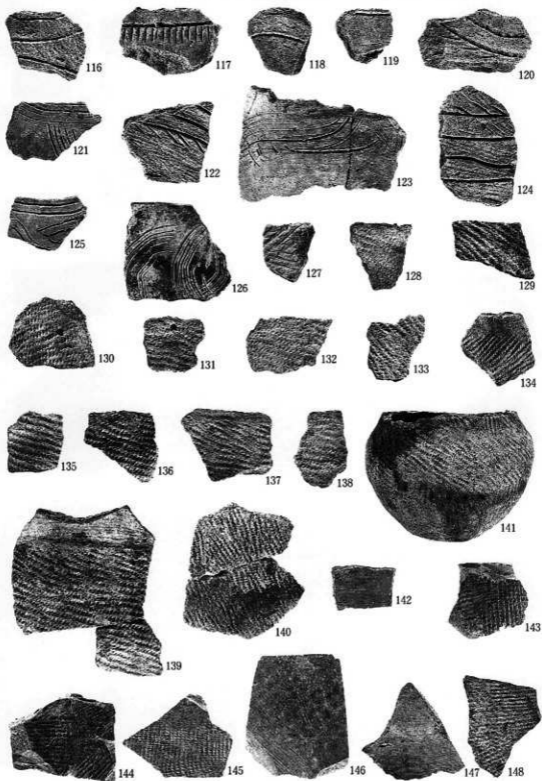
11号住居跡



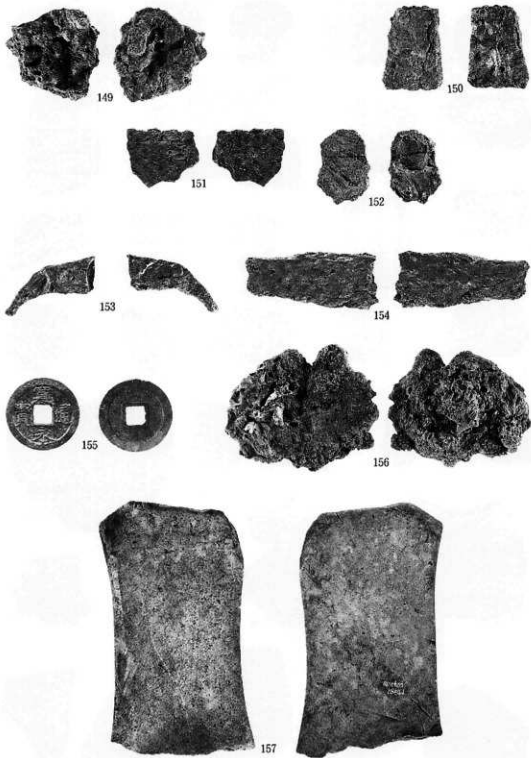
12号住居跡



写真図版 24 住居跡出土遺物(9)



写真図版 25 遺構外出土遺物(1)



写真図版 26 遺構外出土遺物(2)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事 兼 小笠原 喜 一
所 長

副 所 長 米 澤 康 雄

[管 理 課]

管理課長(兼) 米 澤 康 雄

課長補佐 森 岡 陽 一

主 事 阿 部 隆 広

[調 査 課]

調査課長 昆 野 靖

課長補佐 佐々木 嘉 直

主任文化財 小田野 哲 憲

専門調査員 三 浦 謙 一

“ 工 藤 利 幸

“ 高橋 與右衛門

“ 平 井 進

“ 中 村 良 一

“ 中 川 重 紀

“ 藤 村 敏 男

“ 高 橋 義 介

文化財 斎 藤 實 隆

専門調査員 佐 瀬 隆

“ 千 葉 孝 雄

“ 斎 藤 博 司

“ 東海林 隆 幹

“ 佐々木 弘

“ 川 村 均 行

“ 鈴 木 貞 格

“ 伊 東 修 雄

“ 遠 藤 邦 雄

“ 斎 藤 敏 明

“ 神 敏 明

[資 料 課]

資料課長 高 橋 薫

主任文化財 田 鎖 寿 夫
専門調査員

嘱 託 吉 田 一 男

“ 山 館 昇 男

運 転 技 術 士 佐 藤 春 男
兼 技 能 士

文 化 財 佐々木 信 一
専門調査員 小 原 眞 一

“ 村 上 一 修

“ 酒 井 宗 孝

“ 松 本 建 速

“ 金 子 昭 彦

“ 濱 田 宏 久

“ 菅 原 伸 裕

“ 及 川 靖 世

“ 阿 部 勝 則

“ 菊 池 明 芳

“ 及 川 涉 之

“ 星 雅 宏

“ 森 下 知 己

“ 鈴 木 地 裕

“ 菊 村 隆 悟

“ 藤 千 葉 悟

“ 大 久 保 茂 由

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

“ 熊 谷 博

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第150集

明神遺跡発掘調査報告書

国道45号久慈バイパス関連遺跡発掘調査

印刷 平成3年1月25日

発行 平成3年1月31日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 川口印刷工業株式会社

〒020 岩手県盛岡市本町通2-13-8

電話 (0196) 23-3351